

豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ

# 小沢

豊橋校区史

25

*Ozawa*









校区のあゆみ

小 沢





# 未来にはば



# たけ小沢っ子





表浜



東観音寺

# 発刊によせて



平成18年度  
豊橋市総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業にすばらしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものにと終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げます、ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度  
小沢校区総代会長

金 子 政 敏

豊橋市が明治39年8月1日に市制を施行して今日に至るまで100年という歳月を刻み、本日ここに「豊橋市制施行100周年記念 校区のあゆみ 小沢」を発刊できますことを心よりお慶び申し上げます。

この校区史からは先人が築き上げてきました歴史の重みと時代の流れをしみじみと感じとることができ、小沢の歴史と文化、そして自然と伝統など次世代に継承しなければならないものばかりが掲載されています。

明治から大正、昭和から平成へと年号が重ねられ、その折々の生活環境にタイムスリップした気分になってしまいます。

さあ、今年8月新たな100年に向かってスタートを切ったばかりです。これからの主役は、校区の皆様方一人ひとりです。お互いの心と力がひとつにまとまるのが一番大切であると考えていますので、小沢校区発展のためお力添えいただきますよう切にお願い申し上げます。

最後に、校区史編集に携われた編集委員の方々並びに史料提供にご協力いただきました関係各位にお礼を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。

# 目次

# CONTENTS

発刊によせて ..... 5

目次 ..... 6

## 第1章 小沢の自然

1 地形・地質 ..... 7

2 気候 ..... 7

3 生物 ..... 8

## 第2章 歴史と生活

1 大昔から室町時代の小沢 ..... 10

2 江戸時代からの小沢 ..... 12

3 明治以降の小沢 ..... 16

4 戦後の小沢 ..... 18

## 第3章 小沢の産業

1 産業別人口 ..... 23

2 農業 ..... 23

3 漁業 ..... 28

## 第4章 教育

1 学校頒布以前の教育 ..... 29

2 小沢小学校の歩み ..... 29

## 第5章 宗教

1 神社 ..... 36

2 寺院 ..... 37

3 風俗信仰 ..... 40

## 第6章 名所・旧蹟・人物

1 名所・旧蹟 ..... 42

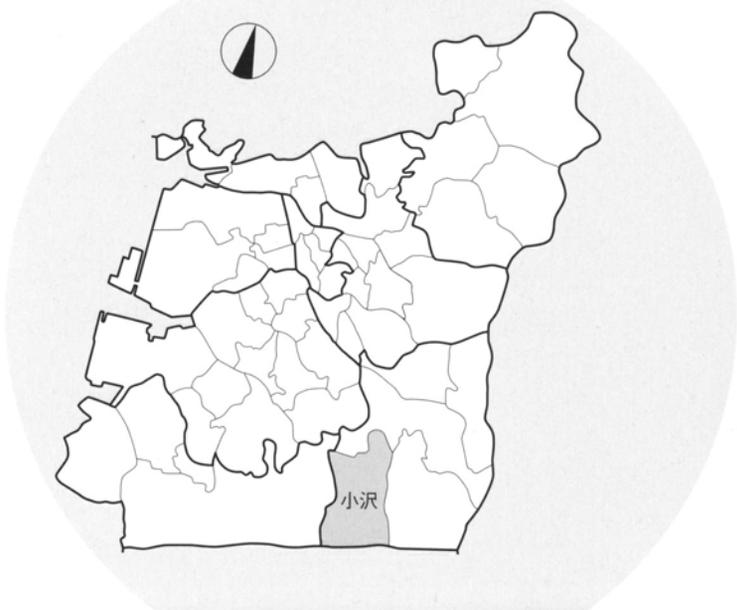
2 人物 ..... 44

五並中学校連風記録集 ..... 45

参考文献・資料等 ..... 51

編集後記 ..... 52

校区の位置



# 第1章 小沢の自然

## 1 地形・地質

### (1) 位置と面積

豊橋駅より小松原街道を南へ約12km、東は小島町芋ヶ谷から西は寺沢町郷中まで約2.6km、北は小島町縄口から南は太平洋岸、遠州灘まで約4.3kmである。

東は細谷町、北は天伯町・豊栄町、西は東七根町に隣接している。面積約9.1km<sup>2</sup>で、校区の学校の位置は東経137°27′、北緯34°41′、標高67mである。

### (2) 地形と地質

**地形** 赤石山脈系湖西連峰は高さ250~300mのなだらかな山並で、そのすぐ南に旧東海道に沿って二川の町並が続き、東海道本線、東海道山陽新幹線、国道1号線が並行して通っている。

梅田川から南側は、洪積台地が海岸まで約6km続くが、ここはかつて小松や雑草が点在し、陸軍の大演習地だった。しかし、今はしっかり開発され、りっぱな畑になっている。

太平洋岸は切りたった崖で、砂浜海岸が白

須賀から伊良湖までおよそ40km続いている。この間、山と沢が連続しており、起伏が大きいのが特色である。

**地質** 小沢校区は、赤石山脈より紀伊山脈に連なる秩父古成層でその崩壊により堆積した洪積層と一部は沖積層よりできている。洪積層は、ほぼ赤褐色酸性の貧弱なる土壌である。

表浜は、東西方向の直線的な海岸線で、高さ40m内外の垂直に近い海食崖が続いている。この崖はきわめてもろくくずれやすい。その中に化石・斜交層理・れき層・かぎ層・湧水などが見られる。

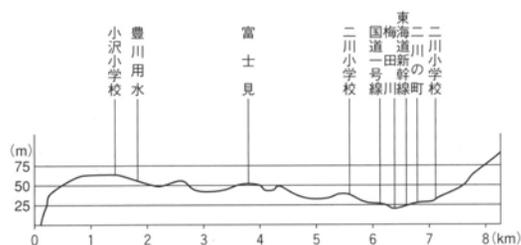
表浜の地形は、一番高い所で標高80m位であり、そこから北側へ向かって千分の一内外の傾斜で低くなっていく。この面を天伯原面と呼び、天伯原面は古生層を基盤として、砂層・泥層・れき層が積み重なっている。この面は堆積した時、水平であったものが地かく変動により、カマボコ山のように曲げられた。

現在、海岸の浸食を防止のために離岸堤や傾斜堤などを施して防止策を講じている。

## 2 気候

### (1) 気温

この地域は、1年を通して比較的温暖である。夏季は塩分を含んだ南東風をうけ、冬季は「三河のからっ風」という寒冷な北西風をよくうける。年間平均気温は16.2度で、2月初旬厳寒の時でも平均気温が3度前後である。最近の最高気温は35.6度、最低気温は-3.1度である。



主な所の高さ  
小沢小学校 (67m)、東観音寺 (66m)、五並中学校 (65m)、開拓農協二川支所 (35m)  
二川中学校 (30m)、梅田川(駅南) (20m)、二川小学校 (30m)

小沢付近の地形断面図

## (2) 降水量

日本における一年間の各地の降水量を平均すると、1,421mm程であるとされている。これに対し当地方の平均降水量は、豊橋市は約1,265mmである。

降雨は初夏、秋季に多く、暖かい気温を考え合わせると、農業を主産業とするこの地方にとっては理想的気象条件下にあると言える。

## (3) 風向

季節風は気温の項でふれたように、冬季は北西風、夏季は南東風で、その交代期はだいたい5月とされている。そして、夏季の南東風はそれほど感じないが、冬季の季節風は、「三河のからっ風」と昔から言われているように強い北西風であり、空気も乾燥しているために気温が高いわりには寒さを感じる。

下のグラフは、昭和26年から55年までの30年間の名古屋と伊良湖における秒速10m以上の強風が吹いた日数を月別に示したグラフである。いかに当地方の冬の季節風が強いかがわかる。

# 3 生物

## (1) 植物

**浜辺の植物** 断崖上層から中層にかけての植物相は下図のようである。浜には、ハマグルマ・ハマゴウ・コウボウムギ・ハマアカザ・ケカモノハシ・タイトゴメなどの砂丘植物が広く見られる。

かつて、上層はクロマツ林が多く見られたが、現在はマツクイムシ等の被害により、30%ぐらいしか残っていない。タブ・シイ・ツバキ・トベラなどの照葉樹の木々が混っており、落葉の木々はカラスザンショ・アカメガシなどが見られる。

**内陸の植物** 内陸部は海岸線に比べ、潮気を

含んだ風を受ける率が比較的少ない反面、冬季の北西風の伊吹おろしが時として相当激しく吹きつけてくる。内陸部の植物の代表的なものは、クロマツ・スダシイ・イヌマキ・タブ・カクレミノといった常緑の高木である。クロマツは、「三河の黒松」と言われるくらい天然生、または植栽生のもが見られる。また、ジネンジョが自生しているが最近では容易に見つけられなくなった。

一方、矮性の低木植物としては、ツワブキ・オニヤブソテツ・ネズミモチ・アリドウシなどが群落を形成している。草木層には、細パカナワラビ・ヤブラン・ジャノヒゲなどが群生しているが、これは、温暖な東三河の随所に見られるところである。

なお、この地域は梨の栽培が盛んであるので、梨の病気である赤星病を防除するために、カイヅカイブキはほとんど植えられていない。

## (2) 鳥類

**夏鳥** サシバ・ツバメなどが3月下旬から姿を見せはじめる。雑木林や人家のある所に現われ、ツバメは人家の天じょう、あるいは屋根のひさしに巣を作る。秋には南方へ渡るが、越冬するものも少数だけ見られる。

**冬鳥** ツグミ・ハクセキレイなどが秋になるとシベリア・北海道から渡ってくる。海岸・池・田畑・雑木林などでよく見られ、木の実や虫を餌として、越冬する。

**留鳥** ゴイサギ・コサギ・トビ・コジュケイ・キジ・ケリ・キジバト・ヒバリ・ヒヨドリ・モズ・セッカ・メジロ・ホオジロ・カラヒラ・スズメ・ムクドリ・ハシボソガラスなどが見られる。丘陵地・平地の林・田畑・河川・竹やぶ・人家の庭先など、いたる所で見る事ができる。

### (3) 魚介類

太平洋沿岸の海蝕崖からは多数の貝化石が発見され、寺沢・小松原・小島附近の崖からはヤマトシジミ・マガキの化石が散出している。これら貝類のうち、今日でも台風の後などの海岸にはヤツシロガイ・カズラガイなどが打ち寄せられているのを見るが、その数は年々減少しているようである。こうした現象の原因は、潮流の変化とも塩分濃度の比重の違いとも言われている。しかし、ナガラミ・マガキ・オキアサリなどは現在でも見ることができる。

第二次大戦後しばらくの間、各村とも総出で地引網を行い、魚類も豊富であった。けれども、今日では漁業より農業と畜産に主力が置かれ、わずかに観光客向けの地引網が行われる程度である。

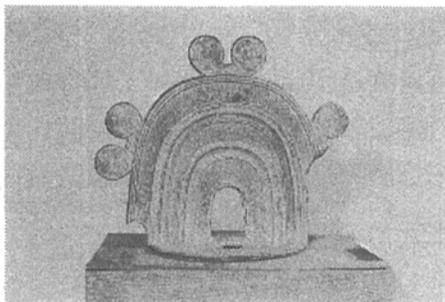
## 第2章 小沢の歴史

### 1 大昔から室町時代の小沢

#### (1) 米づくりのはじめ

紀元前3世紀頃アジア大陸から新しい文化とともに稲作が伝わってきた。弥生時代の遺跡として豊川流域に瓜郷がある。梅田川流域には、植田町車神社北見塚と老津町波入江遺跡がある。

大和地方では文化も次第に発達し、銅を使って鏡や剣、銅鐸などがつくられた。銅鐸は豊作を神に祈り、また、感謝するときの村共同の祭器であったと言われ、現在、東観音寺に所蔵されている銅鐸の鈕部ちゆうぶは、渥美郡史によれば、享和元年（1801）静岡県白須賀付近の2ヶ所で出土したうちの1つであると伝えられ、当時、東観音寺住職であった万年和尚の由来書などから裏付けられている。



銅鐸の鈕部  
(東観音寺蔵)

#### (2) 三河の国

大化改新前、天皇が中心となり、臣・連などの高い姓をもった中央豪族の支配のもとに政治が行われた。地方を支配したのは国造くにのみやつこだった。4世紀頃、豊川流域の穂国造ほくにのみやつことして

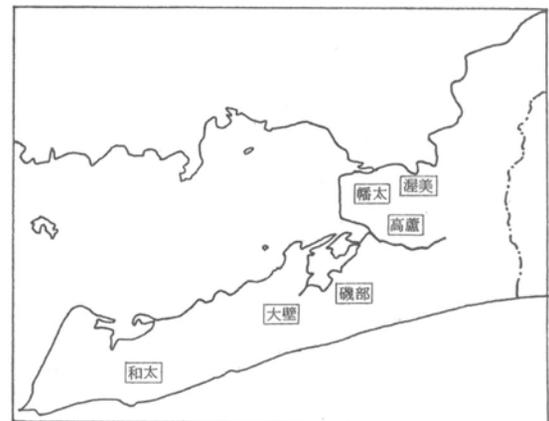
みかどのわけのおおきみ  
朝廷別王が入国した。6世紀頃には、菟上うのかみ足尼すくねが小坂井付近で国を治めた。

大化改新（645）により、中央には太政官を置き、全国136ヶ所に国司を任命して地方政治を行った。奈良時代には、大宝令（701）が施行され、地方は大きく七道に分けられた。伊勢湾から東は東海道となり、以前からあった穂の国は三河国（今の岡崎付近）とひとつになり、参河国と呼ばれくわが国府が豊川のこ国府に置かれた。そして、この国分寺、国分尼寺は規模も大きく立派なものであったことは現在の遺跡から推察できる。

#### (3) 渥美郡あつみごほり

東三河の国を3つに分け、豊川から右岸北方を八名、西を宝飯、豊川南方から海までを渥美とした。

平安時代の中期、源順みなもとのしたごうが編集した「倭名類聚鈔」によれば、渥美郡は6郷からなり、その郷名は「幡太ほだ、渥美あつみ、高蘆たかし、磯部いそべ、大壁おおかべ、和太わだ」である。渥美は早くから綿津見族が来



渥美郡郷名想定図（豊橋市史）

住したところで、その子孫である安曇氏にちなみ、アクミと呼ばれた。渥美は後世、転化した呼び名であると言われる。

渥美郡史によれば、高蘆郷は、梅田川流域地帯にあり、現在の高師の名は、高蘆の転化したものである。範囲は「高師村大字高師、野依・植田・高豊村・二川町にも及び」と記され、小沢は、高蘆郷に所属していた。

#### (4) 高師山古窯址群

豊橋市南部に広がる高師山古窯址群では、古墳時代から奈良・平安時代にかけて須恵器と瓷器とが生産された。10世紀の中頃、「ただならぬ たかしの山のすゑつくり もの思いをぞやくとすときく」と詠まれた歌があり、その当時すでに窯場としてこの地方は広く知られていたことがわかる。

高師山古窯址群は、南北約6km、東西約4kmほどの広がりを見せ、細谷地区を中心に北は大岩地区、東は雲谷地区にわたり、須恵器窯址が数多く発見され、窯址の数は35群100基以上であると推測されている。

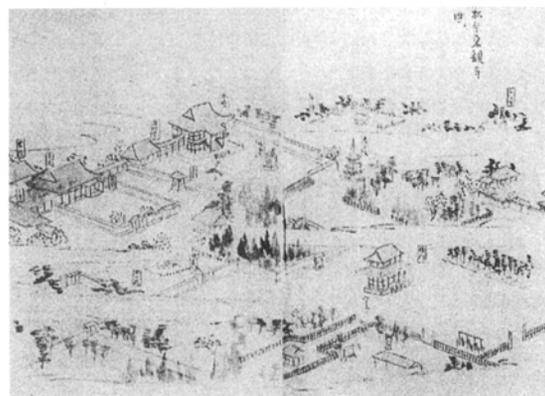
#### (5) 伊勢街道と東観音寺

伊勢から伊良湖に渡海し、太平洋沿いに渥美半島を縦貫して、白須賀で東海道に合する道は、古来、伊勢街道または熊野街道と呼ばれ、特に渥美から白須賀までを片浜十三里といわれた。

三河は伊勢と密接な関係のあることは綿津見族の来住したことによっても推測される。さらに古代、この地方は伊勢・熊野との交渉が深く、神宮領の神戸・御園・御厨が集結し、毎年、神宮への寄進物が海を渡って輸送され、当郡各地に散在した山伏寺から熊野参詣の信者で賑わったようである。

伊勢街道沿いにある東観音寺は、寺伝によると、天平4年(732)4月18日、行基菩薩

が紀州熊野社に参籠し、翌年正月18日、海岸に立って祈念するうち熊野社の霊告により馬頭観音の像を刻み、一字の堂を建てたのが起源とされている。



東観音寺古絵図(参河国名所図絵)

平安末、「参河国名所歌合」の中には、小松原を詠んだ次のような歌があるので、小松原が当時、歌名所となっていたと思われる。

行末のはるかに見ゆる小松原  
君が千とせのためしなりけり  
(清輔朝臣)

神代より生ひやそめけん小松原  
いく千世へぬとしる人ぞなき  
(藤原道經)

#### (6) 鎌倉時代の小松原

東観音寺には、安達泰盛が文永8年(1271)に寄進した馬頭観音像の懸仏がある。紀年、寄進者、細工師のそろった銘のある懸仏では日本最古のもので、昭和34年、国の重要文化財に指定された。この懸仏は円形の平板に仏像を半肉で付着してあり、吊るすことができるようにしてある。円板は木質の上を金銅板でおおっていて次のように刻まれている。

「三河国奉鑄 小松原寺 馬頭観音菩薩 當地頭 藤原朝臣 泰盛勸進 沙門行心行快 細工 沙彌成仏 文永八年大歳(辛未)正月十八日」(大意は「当地の地頭安達泰盛が馬頭観音を鑄奉る。開眼の僧侶は行心行快、細

工師は沙彌成仏である」)

安達泰盛は源氏譜代の臣で北条氏とは外戚の関係にある安達盛長以来三河と関係が深く、泰盛の代には小松原を莊園として開拓しているから、現在の小松原はその頃できたものと思われる。寺の栄えと同時にその付近には相当の人家が集まっていたことがうかがわれる。



安達泰盛寄進の懸仏（東観音寺蔵）

### (7) 小島、寺沢村の分村

正保2年(1644)の高師神明社の棟札むなふだに高師村内の人々と共に、小島村助藏、寺沢村左兵衛門らが、ここの祭りには、必ず招かれて宮座に着いたことが記されている。宮座とは、氏子が氏神を祀るとき、当時の貴賤貧富に関せず、古くから定めて祀をするときの座席である。なお、高師神明社は、平安時代より高足御厨ほうしの奉祀した古い神社である。

古記録によると高足村が新郷で、次第に分れたものである。

建仁元年(1201) 細谷村(将軍頼家のとき)

同 2年(1202) 七根村

文永4年(1267) 寺沢村(亀山天皇のとき)

興国2年(1341) 小島村(後村上天皇のとき)

このように分村した後も、親村の宮座についていたものらしい。

### (8) 室町時代の小松原

田原の豪族、戸田氏の全盛時代で、伊勢街道も往来が激しかったので、田原藩では赤羽根付近に関所を設けて関銭を取っていたこと

が、天文5年(1536)の古文書からわかる。戸田氏はこの関銭の一部を割いて東観音寺に寄進していた。



東観音寺関銭寄進状(渥美郡史付図)

## 2 江戸時代の小沢

### (1) 村の支配

永禄8年(1565)、徳川家康は吉田城を落とし、つぎつぎに東三河を支配していった。その際、東観音寺などの寺社に対して、禁制・寄進状を与えて民心の安定を図っている。

関ヶ原の戦(1600)後、渥美郡の領地は、吉田藩(松平家清)、田原藩(戸田尊次)、天領(徳川幕府直轄の領地)に分けられた。

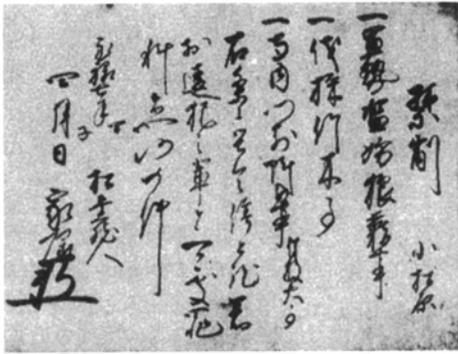
小松原村については東観音寺由緒書(同寺蔵)に、

「小松原村高百式石並海辺漁船五艘一村一円守護不入寺家進止之旨

慶弔7年(1602)寅6月16日御朱印頂戴被為仰付候」

とあり、全村、東観音寺領であった。また、小島・寺沢村の支配は次のように目まぐるしく変わった。

|             |                      |
|-------------|----------------------|
| 慶長6年(1601)  | 天領                   |
| 天和元年(1681)  | 鳥羽領                  |
| 享保10年(1725) | 天領                   |
| 寛延元年(1748)  | 碧海郡西大平藩<br>(大岡越前守忠相) |
| 安永3年(1774)  | 吉田領                  |
| 享和3年(1803)  | 天領                   |



東観音寺あて徳川家康禁制—永禄7年—  
(国立公文書館蔵 豊橋市史)

(2) 天領支配所・代官の変遷

(東海道二川宿の研究)

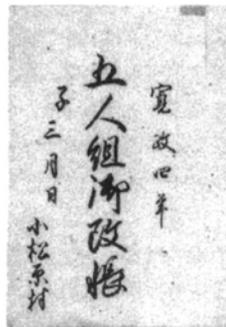
| (支配所) | (代官)     | (期間)               |
|-------|----------|--------------------|
| 赤坂    | 岩室伊右エ門   | 享保11年(1726) 3月     |
| 駿府    | 小林又左エ門   | 享保11年(1726) 7月     |
| 同     | 山田治右エ門   | 享保14年(1727)        |
| 同     | 永井孫次郎    | 享保19年(1734)        |
| 島田    | 天野助次郎    | 寛保2年(1742)         |
| 同     | 辻源五郎     | 寛延2年(1749)         |
| 同     | 岩出伊右エ門   | 宝暦6年(1756)         |
| 同     | 真野惣十郎    | 明和1年(1764)         |
| 同     | 岩松直右エ門   | 明和6年(1769)         |
| 同     | 池島多内     | 安永1年(1772)         |
| 同     | 岩松主税     | 天明2年(1782)         |
| 同     | 山田茂左エ門   | 寛政1年(1789)         |
| 同     | 辻甚太郎     | 寛政4年(1792)         |
| 赤坂    | 小野田三郎左エ門 | 寛政8年(1796)         |
| 同     | 松下内匠     | 文化1年(1804)         |
| 同     | 伊奈玄蕃     | 文化13年(1816)        |
| 同     | 羽倉外記     | 文政4年(1821)         |
| 同     | 平岡彦兵エ    | 文政12年(1829)<br>3代? |
|       | 清兵エ      |                    |
|       | 熊太郎      |                    |
| 同     | 岩本十輔     | 天保6年(1835)         |
| 同     | 平岡熊太郎    | 天保7年(1836)         |
| 同     | 小笠原信助    | 天保10年(1839)        |
| 同     | 山上藤一郎    | 天保13年(1842)        |

|    |       |            |
|----|-------|------------|
| 同  | 岡崎兼三郎 | 嘉永6年(1853) |
| 赤坂 | 林伊太郎  | 安政4年(1857) |
| 同  | 今川要作  | 安政5年(1858) |
| 中泉 | 川上猪太郎 | 文久2年(1862) |
| 同  | 桜井久之助 | 元治1年(1864) |
| 赤坂 | 田上寛蔵  | 元治2年(1865) |
| 同  | 大竹庫三郎 | 慶応3年(1867) |

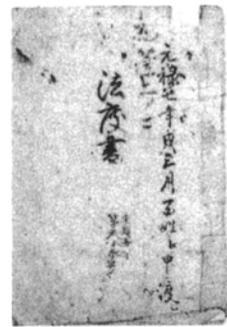
(3) 幕末における村の石高

|      |      |      |      |
|------|------|------|------|
| 小島村  | 391石 | 大脇新田 | 23石  |
| 小松原村 | 117石 | 大岩村  | 484石 |
| 寺沢村  | 178石 | 雲谷村  | 500石 |
| 上細谷村 | 862石 | 中原村  | 172石 |
| 下細谷村 | 610石 | 原村   | 400石 |
| 二川村  | 650石 |      |      |

(4) 五人組制度



小松原村五人組帳  
(寛政4年)



東観音寺領法度書(元禄7年)  
(東観音寺文書)

村は藩主や天領支配所の代官のきびしい統制を受け、村方三役といわれた庄屋、組頭、百姓代の役人が村政を行った。庄屋が中心となって村政を運営し、組頭がこれを助けた。百姓代は庄屋・組頭を監視したり、年貢の割当や納入に立ち合ったりした。

幕府は年貢のとりたて、犯罪防止、また幕府や藩のお触れの徹底を図るため、大体5人を1組として構成し、その組に五人組頭を置いて連帯責任をとらせた。これは五人組制度と呼ばれ、近隣がまとまった生活行動を営み、

相互扶助の役割も果たした。

寛政4年(1792)の小松原村五人組帳をみると、庄屋喜平次組頭仙蔵、百姓代善蔵という人の名や12名の五人組頭が記されている。

また、農民の行動や生活について規制を加え、箇条書きにしたものを農民に分け与えた領主もいた。これは御法度と呼ばれた。

### (5) 検地と年貢のとりたて

幕府は耕地の生産力と耕作者の年貢負担とを確定するため、検地を行った。検地帳には一筆ごとの土地について土地の所在を示す小字名、田畑、屋敷の別、上中下等の土地の品位、面積や収穫高(分米)、耕作者名等が記入された。そして最後に全筆にわたる集計があつて村高が示されている。村高に税率を乗ずると年貢の額が決まる。年貢の明細を記した書付を庄屋に交付し、この書付は免状と呼

| 石斗升合 |               |
|------|---------------|
| 高 辻  | 153.801       |
| 内    | 31.255 当風損    |
| 残 高  | 122.546 (毛付高) |
| 高    | 92.113 田 方    |
| 此取   | 19.344 2ツ1分   |
| 高    | 30.433 畑 方    |
| 此取   | 3.652 1ツ2分    |
| 取米合  | 22.996        |
| 外    |               |
| 高    | 20両 網方        |
| 此全   | 8両1部2朱 あみ方請候  |
| 高    | 3斗1升6合 畠方落地   |
| 此取   | 6升3合          |

寛永10年寺沢村の年貢

| 年 代            | 運上金   |
|----------------|-------|
| 寛永10年          | 8.12  |
| 〃 11年          | 8.22  |
| 〃 12~14年       | 8.32  |
| 〃 15年          | 9.12  |
| 〃 16年          | 9.32  |
| 寛永19年<br>~寛文4年 | 10.12 |
| 寛文5~12年        | 15.21 |
| 延宝元~3年         | 19.13 |
| 〃 4~6年         | 20.10 |
| 〃 7年           | 24.11 |

寺沢村の網方運上

| 年 代             | 毛付高      | 免       | 取高     |
|-----------------|----------|---------|--------|
| 寛永10年<br>(1633) | 石 92.113 | 21.00   | 19.344 |
|                 | 畑 30.433 | 12.00   | 3.652  |
| 〃 11年           | 137.570  | 21.00   | 28.890 |
| 〃 12年           | 田119.057 | 18.00   | 21.430 |
|                 | 畑 30.433 | 12.00   | 3.652  |
| 〃 14年           | 122.235  | 20.00   | 24.447 |
| 〃 15年           | 140.949  | 29.00   | 40.362 |
| 〃 16年           | 143.414  | 27.00   | 38.722 |
| 〃 17年           | 149.940  | 30.00   | 44.847 |
| 〃 18年           | 136.077  | 31.00   | 42.184 |
| 〃 19年           | 田101.056 | 25.00   | 25.264 |
|                 | 畑 30.433 | 12.00   | 3.652  |
| 〃 20年           | 129.904  | 27.00   | 35.074 |
| 天保4年<br>(1647)  | 田 94.107 | 32.00   | 30.114 |
|                 | 畑 30.433 | 27.00   | 8.217  |
| 慶安元年<br>(1648)  | 130.690  | 33.00   | 43.128 |
|                 | 〃 2年     | 139.954 | 34.00  |
| 承応元年<br>(1652)  | 田 99.995 | 30.00   | 29.999 |
|                 | 畑 30.433 | 25.00   | 7.608  |
| 〃 2年            | 138.140  | 34.00   | 46.968 |
| 〃 3年            | 田 85.511 | 33.00   | 28.219 |
|                 | 畑 30.433 | 25.00   | 7.608  |
| 明暦元年<br>(1655)  | 93.412   | 32.00   | 29.892 |
|                 | 〃 2年     | 134.494 | 34.00  |
| 〃 3年            | 田 94.031 | 33.00   | 30.747 |
|                 | 畑 30.433 | 30.00   | 9.130  |

寺沢村の租率(豊橋市史)

ばれた。

寛永10年(1633)の寺沢村免状をみると、次の通りである。

村高の153石8斗1合に対して31石余の風害があり、引高は122石5斗4升6合である。田の租率21%、畑の租率12%であり、田畑の取高は22石9斗9升6合である。他に、網方(海高)が20石、<sup>おちじ</sup>落地(検地もれの土地)が6升3合となっている。

免(租率)は上昇傾向にあり、苦しい年貢がうかがわれる。

### (6) 伝馬役と助郷

江戸時代末期において農民が最も苦しんだ負担は、伝馬役と助郷であった。江戸時代は交通がますます頻繁となり、街道の宿駅に常設した人馬だけでは足りなくなり、付近の村々からも援助させた。これが助郷である。

宿駅には人足100人、馬100疋を普通の荷物、旅客の運搬のために用意し、人馬の組立てを円滑に行うように定められていた。したがって二川宿、白須賀宿のように規模の小さい宿駅では、その維持に困難をきわめた。

男子15才以上60才以下の働き手を助郷という名のもとに宿駅勤務させられた農家では農耕もままならず、生活は苦しくなるばかりであった。

白須賀宿は、享保10年(1725)をみると、戸数613戸、人口2,704人であった。助郷村は小島村、寺沢村をはじめ20ヶ村に及んだ。渥美郡では次の村があげられる。

| 村高        | 村高          |
|-----------|-------------|
| 小島村 377石  | 東西伊古部村 487石 |
| 寺沢村 162石  | 原村 290石     |
| 上細谷村 810石 | 中原村 106石    |
| 下細谷村 592石 | 雲谷村 358石    |
| 七根村 400石  | 高塚村 257石    |

### (7) 東観音寺の繁栄

家康が天正15年（1587）9月19日東観音寺に1泊したこともあって、ますます信仰が厚くなった。また、歴代将軍家や領主の厚い崇敬を受け、末寺数十か寺をかかえる大寺となった。

東観音寺にある古境内図は、寛文の頃（1661～1673）のもので、筆者は明らかではないが、東観音寺の旧態を知る好資料であるとともに、江戸時代前期の地方風俗画としても貴重である。

寺の位置は、現在地から南へ1.5kmばかり離れた遠州灘に臨む丘陵地にあった。立派な堂塔伽藍、多くの参詣者、寺の門前に立ち並ぶ民家の様子が精密に写實的に描かれている。また、海岸に沿って伊良湖へ通う伊勢街道があり、往来の旅人で賑わっている。沖には多くの船がみられ、伊勢方面に向かうには陸路よりむしろ安全な海路を利用する人々も多かったのであろう。浜では、当時すでに地引網漁が行われており、漁業のさかんな様子がうかがわれる。

年々、参詣者は多くなり、郡内はいうに及ばず、駿府、遠州、三河より信州にかけて、多数の信者があったことが知られている。



東観音寺古境内図（東観音寺蔵）

### (8) 遠州灘と難破船

江戸時代になると海運は船の発達とともに著しい発展をとげ、遠州灘を往来した船の数は限りないものであった。上方と江戸の間に位置していた遠州灘は船の難所と言われ、かなり多くの船が遠州灘では難波した。江戸時代における難波船の処理は幕府より出された掟書「浦高札」の条文に従って行われた。寛文7年（1667）に小松原村に建てられた浦高札が東観音寺に残されている。



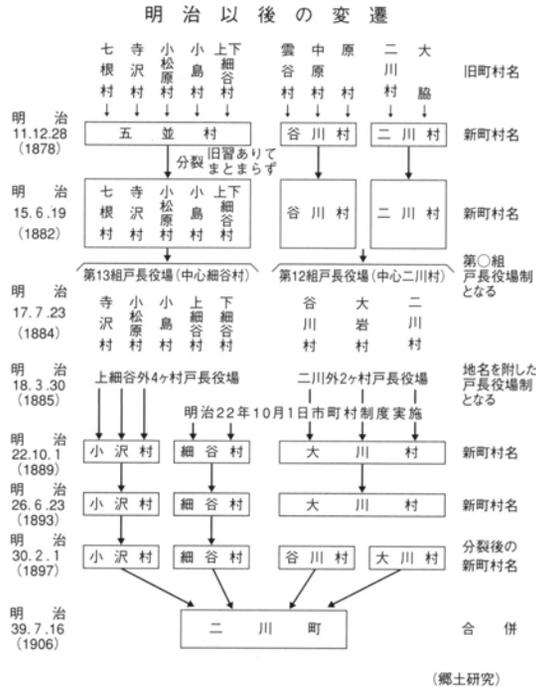
寛文7年浦高札（豊橋市史）

### (9) 宝永の大地震

宝永4年（1707）10月、突然、中部より関西地方一円に大きな地震が起きた。細谷町常光寺古記録によると、  
「10月4日、昼9つ過ぎより大地震、近代未聞の地震なり。南西の方、大いに鳴動く。申8つ時、大津波あり。村々の網船、その他の漁具残らず流出し、山は崩れ、谷は埋りて人馬多く死す。とりわけて破損おびたはきは野田7郷なり。赤沢、東伊古部、西伊古部、34か所57町4方の海中に島でき、この日夜に入り、214度、地震ひ、人々安き心なく野に臥し、山に住むこと2か月。」  
と惨たる様子が知られる。この大地震の後、大被害を受けた東観音寺は現在地の高台に移転したのである。

### 3 明治以降の小沢

#### (1) 明治以降の村の変遷



#### (2) 明治新政府の成立と五並村

五並村村誌によれば、明治時代の初め、本村は、版籍奉還、廃藩置県のため、次のように変遷している。

- 寺沢村 明治元年 徳川家御領から三河県へ  
明治5年 愛知県
- 小松原村 明治3年 東観音寺領から静岡県へ  
明治5年 額田県  
明治5年 愛知県 (11月)
- 小島村 明治元年 徳川家御領から三河県へ  
明治2年 静岡県  
明治5年 額田県  
明治5年 愛知県 (11月)

明治11年、寺沢、小松原、小島村は上細谷、下細谷、東七根、西七根とともに統合して、渥美郡五並村となった。



五並村村誌 (大須賀哲夫氏蔵)

#### (3) 製糸業の発達

明治新政府は、氏族授産事業の1つとして養蚕業を積極的にすすめていった。明治元年、三浦碧水是管轄の郡村に桑苗を交付し、養蚕の道を開いた。

同年、細谷の朝倉仁右エ門は、失敗をくり返しながらも養蚕の経営基礎を確立し、そのすすめもあって著しく普及し、明治40年には、豊橋地方の桑園面積は15,160町歩まで発展し、繭の生産も220万7,800貫と伸び、製糸工場が相ついで設立され、工場数も大小合わせて2,184工場となった。大正4年には、長野県について全国2位の産繭額を上げた。

明治から大正時代にかけて、小沢校区にも4軒の製糸工場が操業していた。

| 工場名   | 所在地 | 工場主    | 創業年月  |
|-------|-----|--------|-------|
| 山忠製糸  | 小島  | 鈴木伊右衛門 | 明治43年 |
| ヤマニ製糸 | 小松原 | 金子仁左衛門 | 不明    |
| 金子製糸  | 小松原 | 金子幸作   | 明治25年 |
| 大林製糸  | 寺沢  | 大林宇吉   | 明治21年 |

この頃、畑は、ほとんど桑が植えられ、講習会なども学校を使って、頻繁に行われ、どこの家でも米について桑が多かった。養蚕は人の住む母屋2部屋ほどを使い、障子をしめきって部屋中を24度位に温め、真ん中に大きな柵をつくって、蚕を飼い、桑の葉を与えて繭ができやすくした。その繭から絹糸をとりだしたのである。

#### (4) 漁業の発達

表浜一帯では江戸時代から地引網漁が行われ、明治のはじめまで村の勢力者が網を所有し（小島の善エ門網、五郎左エ門網など）、村民はその網元の下に労賃を得て働いていた。

しかし、明治中頃より個人持ちの網から村網（部落共有の網）になった。網元は漁師の仲間より選出され、毎年交代で網の世話をした。網元は全体の責任者であり、その網元を助けるのが小網元、次に船頭しんがしを助ける殿、その下の若者頭、そして海岸の丘の高い所に立って魚の群れを見つめる山見がいた。山見が采配さいはいを持って合図すると、浜辺に待機している漁師達は一斉に大海に乗り出していく。



表浜の地引網  
(写真集 豊橋)

漁の方法には昔からの地引網によるものと、いなだ網（沖網用）その他、ずり漁とながらみとり等がある。網のかけ方にも1隻の船でかけるコマイと、2隻の船でかけるモヤイとがあり、前網と沖網とがある。前網にも魚群の色を見ずにかける平がけと、色見を見てからかける色見がけの2つがある。

小沢で行っていたのはコマイによる方法が多かった。まず、網を船に積み込み、沖へ漁船を乗り出し、山見の指図によって網は魚群を取り巻いて下ろされる。その両端はおかのまきに結ばれ、牛や人間の力で引く。網が岸に近づくと船からおりた漁師たちは海中に飛び込み、網が砂の中に食い込まぬように支え、網の袋部が近づくとまきは取り除き、人間と牛の力で引き上げた。

#### (5) 打瀬網事件

打瀬網とは沿海を1隻の船で引く底引網のことである。明治5年頃から次第に盛んになり、伊勢湾・三河



打瀬網 (写真集 豊橋)

湾を漁場としていた。そして、しだいに打瀬網の船が表浜の沿海にも進出するようになって地引網を圧迫したので打瀬網反対の声が高くなった。その結果、県布達として打瀬網漁法は漁類を乱獲し、稚魚の繁殖を阻害するとの理由で、明治22年3月限りで禁止することが決まった。ところが打瀬網業者が納得せず両者の対立は深刻となり騒ぎは広まった。県でも断固たる処置ができず、禁止期間を再三にわたって延期するはめとなった。そして解禁派と禁止派の紛議は、県下各地で発生した。とりわけ渥美外海の地引網は著しい打撃を受け、加えて明治24年から未曾有の不漁に見舞われ、漁民の不満が爆発した。表浜漁民が示した資料によれば、ここ10年間における漁獲高は3分の1に減少した。

| 年     | 漁獲高      |
|-------|----------|
| 明治14年 | 788,520円 |
| 明治15年 | 749,094円 |
| 明治16年 | 630,816円 |
| 明治17年 | 354,834円 |
| 明治18年 | 314,306円 |
| 明治19年 | 313,123円 |
| 明治20年 | 327,927円 |
| 明治21年 | 370,425円 |
| 明治22年 | 347,731円 |
| 明治23年 | 248,865円 |

明治25年2月27日、打瀬網の取り扱いについて、かねてから県当局に不満をもっていた小沢、細谷、高根の3か村の網元らは、大応

寺（小島町）に集まり、小沢村の朝倉幾太郎の発議により穏当な手段では解決し得ないとして渥美郡役所へ強訴することを決めた。

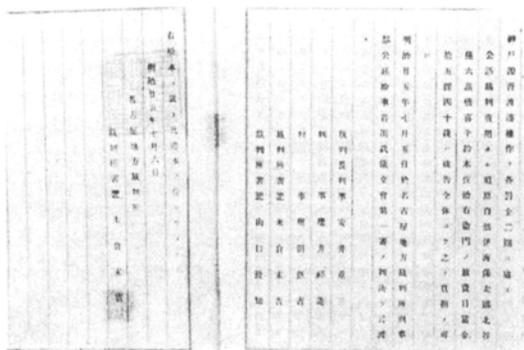


渥美郡役所（写真集 豊橋）

翌々日の2月29日早朝、高根村大字七根字一の沢に漁民482名が集結し、幾太郎を先頭に隊列を組んで午後8時頃、郡役所に押しかけ、郡長松井讓<sup>ゆずる</sup>に面会を強要して庁内に乱入し、職員に暴行し、ガラス・器物を手当たり次第破壊した。そのため、豊橋警察署と憲兵が急拠出動し、午前11時頃、鎮圧した。

朝倉幾太郎外209名が兇徒嘯集罪で検挙され、主謀者幾太郎、教唆者戸田五郎左衛門外13名が重禁固、60名は免訴、残りの150名は附和隋行罪として罰金刑に処せられた。

古来からのこの辺りは静かな農村地帯であったが、この事件では村人すべてがかかわる大事件となってしまった。20年近く続いた打瀬網騒動も明治33年に一応、終止符を打ったのであるが、漁民の中には地引網漁に見切りをつけ廃業するもの、また、漁類卸売営業に転業するものなどもあった。また、養蚕業の普及とともに漁業従業者はしだいに減少した。



名古屋地裁第1審判決書（朝倉治氏蔵）

## (6) 軍隊と小沢

明治41年10月、豊橋に第15師団が設置されるとともに、高師・天伯原は陸軍演習地として使用されることになり、すでに耕地化の進んでいた二川・高豊・高師3町村所有の原野（一部民有田畑を含む）は軍部に買上げられることになった。以後、昭和20年の終戦まで続いた。

陸軍演習場内における小沢の民有耕作地は、次の通りであった。

|     |   |            |
|-----|---|------------|
| 小松原 | 田 | 7町2反5畝17歩  |
|     | 畑 | 5反2畝18歩    |
| 小島  | 田 | 42町6反2畝13歩 |
|     | 畑 | 1町3反1畝25歩  |
| 寺沢  | 田 | 33町7反8畝4歩  |
|     | 畑 | 14町9畝14歩   |

小沢では出征していく人があると、学校の子どもたちも先生に連れられて、村境の小島町海見坂まで見送りに行った。家族や身内の者は、さらに二川駅まで送り別れを惜しんだ。

高等科の子どもたちは、出征兵士の留守宅へ農繁期の農作業を手伝うため勤労奉仕に出かけた。

戦争も末期に近い昭和19年頃になると、海岸の防備にあたるため村に軍隊が駐屯し、学校の校舎も宿舎として使われた。

## 4 戦後の小沢

### (1) 小沢農業協同組合の沿革

戦前の組合 昭和9年5月、二川町西部産業組合が誕生発足した。これは小島・小松原・寺沢の3部落が合同して設立し、信用・販売・購買・利用を経営した最初の組合であった。

太平洋戦争が激しさを増すとともに、国内の生活物資は極度に乏しくなったため、農作物の作付は国の統制下に置かれ、自由に栽培

することは許されなかった。主食の米・麦の代用として、さつまいもの栽培が盛んに行われた。昭和18年、二川町西部産業組合は、組織強化のため二川町内の他の組合と合併して、二川町農業会西部支所となった。この農業会の事業として、二川町全体の澱粉工場を上細谷に建てた。しかし、水や動力事情が悪く、予定の成績をあげることはできなかった。

小沢農協の設立 終戦とともに二川町農業会は解散し、元の産業組合単位に分かれて、昭和23年8月、小沢農業協同組合が設立され新時代に順応した体制を整えて発足した。組合長には金子光太郎、専務には陶山要作、冨田儀一、朝倉源吉、幾田一雄、本馬祐敏、鈴木勝が就任した。

上細谷にあった澱粉工場は解散し、小沢・二川・細谷の3地区に農協単位で1工場ずつ新たに設置することになった。昭和26年夏、小沢農協は寺沢町（現在のライスセンターの位置）に澱粉工場を建てた。工場長の近藤好夫の熱意と組合員の努力が実を結び、澱粉事業は年々、加工量が増加していった。3年後には60万貫程度の処理ができる摺込機が導入された。昭和30年には、灌漑用機械揚水工事が県の補助で工事費200万円をかけて行われ、工場の敷地内に深さ約92mの井戸が掘られた。秋から冬にかけては工場で使用し、夏季には農業用水としても水田に利用された。井戸水が大変きれいなため、製品の澱粉に光沢があり、評判を高めた。

昭和33年、新農村事業として補助金99万円を受けて、小松原の集荷所を建てた。また、同年に県の補助で開田も行った。

昭和34年、澱粉工場施設を改善する予定であったが、組合員の要望によって有線放送が、県・市の補助金3分の1、農協の負担3分の1、組合員の負担3分の1で完成した。

昭和37年11月、小島梨組合は小沢農協梨部

会として発足した。肥料、農薬、出荷資材の全部を農協1本とし、また梨の出荷販売も農協が主体となって取り扱うことにした。大正元年に陶山要作、朝倉品吉、朝倉友吉、朝倉信次らによって梨の木が植えられて以来、梨農家は年々増加していき、昭和41年には最高の114戸となった。市場は名古屋・大阪・浜松・横浜・東京へと広がり、トラックで1日100t以上も出荷した。

昭和42年3月、小沢農協は二川・細谷・高豊・杉山・老津・大崎・植田・野依・高師・磯辺・福岡の農協とともに合併して、豊橋市南部農業協同組合小沢支所となった。その後、農協も規模拡大して、農業の近代化と農業経済の維持発展のため、新しい農業協同組合体制の確立をめざし、平成9年4月1日、当時の豊橋市南部農協・豊橋市西部農協・豊橋市北部農協・豊橋市東部農協・豊橋市開拓農協が大同団結し、豊橋農業協同組合を発足させ、小沢支所は小沢支店となり、地域の拠り所として現在に至っている。

## (2) 富士見の開拓

昭和20年8月15日の終戦とともに高師・天伯原の陸軍演習地跡、約2,800haという広大な土地を利用して、豊橋地区の開拓が始まった。これは戦後の混乱期に、失業者救済と食料対策のため、国策として実施されることになったのである。

同年10月1日、愛知県や豊橋市に就農相談所が開設され、就農地の斡旋のため、希望者を募集した。

二川をはじめ、高師・栄・高豊・若松・大清水・天伯・岩西地区に旧軍人を主体に一部地元から約1,000戸が入植した。この中、二川地区は豊栄30戸、縄口24戸、比留茂33戸、陸美34戸、計121戸が入植した。

開拓された土地は、起伏に富み、洪積層で

礫、砂、粘土で酸性が強くて、有機質に欠けるきわめてやせた土壌であり、生育の悪い小松・笹・すすきなどが自生していて、開墾は容易ではなかった。



二川開拓地区 (愛知県開拓史)

### 第1期 (昭和20年—25年)

昭和20年11月、農地開発営団が国の委任を受けて開発することになった。入植者の住宅は営団斡旋の6坪2間1万円のセット住宅であった。3.6m幅の幹線道路14本がつくられたが、複雑な地形から急勾配、カーブの多いものとなった。

昭和22年、米軍より営団が非民主団体として解散させられ、その後、二川開拓団 (昭和23年、二川開拓農協となる) が中心となって、県 (地方事務所、開拓指導所)、二川町と協調して開拓を進めた。

入植者への土地配分は、当初、営団から10戸程度のグループが1区画の配分を受け、これを各戸が抽選でほぼ均等に配分していた。昭和23年から国 (県が代行) の土地売渡に伴い、各農場ごとに土地委員を選出し、正式に配分が行われた。1戸当たりに配分された耕地は145aであった。

開墾はほとんど唐楯等を使って人力で行われた。夏作にはさつまいも、冬作には小麦が作付された。土地を肥やすため入植者は荷車で二川町や豊橋市街からじんあい、人ぶんを集めたり、地区内の笹や野草を刈って堆肥と

した。

昭和23年から開拓者資金制度で、炭酸カルシウムが導入され、酸性土が改良された。また、同年から県・国の家畜導入資金の借入れにより役牛や豚の飼育が始まった。この頃からさつまいも、麦の他、酸性土にも育つ西瓜・大根などが栽培され、西瓜は組合から共同出荷されるようになった。

昭和25年 (1950)、電気がひかれ、開墾もようやく安定して営農も軌道にのってきた。

### 第2期 (昭和26年—33年)

入植して10年、開墾はほぼ終わり、これまでの労苦が実り、生活は安定してきた。しかし、離農者は依然として後をたたず、約3分の1の者が農地一切を売却し、離農していった。

昭和26年から34年、国・県の無償で炭酸カルシウム、熔成磷肥が入れられ、名古屋市のじんあいが、昭和25年から27年にかけて、トラックや貨車で輸送されて大量に投入されたので、作物の収穫が高まった。

さつまいもは小沢農協や二川町のでんぶん工場に出荷された。西瓜は市場での信用も高くなった。大根はたくあんに加工され、大阪市場に出荷された。

家畜では、昭和33年には和牛は半数の農家に普及し、乳牛は27戸で飼われ、豚は1戸当たり3頭、にわとりは一戸当たり10羽が飼われた。

昭和33年、初めて動力耕運機が8台入り、5戸から10戸で共同利用した。また、トラック・



オート三輪も11台、共同購入し、利用された。

### 第3期 (昭和34年以降)

昭和34年の伊勢湾台風の被害を受けながら

も、助成制度を利用し、山成畑は機械開墾によって段々畑となった。また開拓営農振興対策資金2,020万円を借用し、農舎40棟、畜舎41棟、ビニルハウス2棟、スプリンクラー11基、和牛9頭、乳牛26頭、動力耕運機14台、動力噴霧機5台等が整備、導入され、営農を充実させていった。このような農業において豊川用水（昭和40年一部通水、昭和43年全面通水）の果たす役割は大きかった。豊川用水によって干害解消されたばかりでなく、計画的な管理作業が可能となり、大規模専業農家が増加した。

昭和37年、町名が富士見、豊栄、寺沢町（睦美）となったが、二川開拓の絆は保たれ、各種行事は共に行っている。

昭和38年、簡易水道が建設されたので、飲料水は井戸にたよらなくてもすむようになった。

二川開拓農協は、昭和41年に豊橋開拓農協に合併し、二川支所となった。

## (2) 豊橋市への合併

明治39年、渥美郡花田村、豊岡村を併せて豊橋市となった。そのとき、小沢村は、大川村、細谷村とともに渥美郡二川町となった。この町制は、昭和30年、豊橋市に合併されるまで続いた。

昭和28年、政府は広域的事務を処理するために、市町村は相互に協力し、事務を共同処理する体制を整える必要を認め「町村合併促進法」を施行した。豊橋市への合併と決まった二川町では、合併のための準備機関として「町村合併協議会」を設立することとした。

昭和30年3月1日、二川町は渥美郡高豊村、老津村、杉山村杉山、宝飯郡前芝村、八名郡石巻村、<sup>そらわ</sup>双和村賀茂とともに、豊橋市に合併された。



二川町長及び町会議員  
(昭和30年2月撮影 本馬祐敏氏蔵)

## 小沢校区の世帯数、人口推移

| 年     | 世帯数 | 人口総数  | 男     | 女     |
|-------|-----|-------|-------|-------|
| 明治39年 | 307 |       |       |       |
| 大正元年  | 306 |       |       |       |
| 昭和元年  | 250 |       |       |       |
| 昭和30年 | 402 | 2,317 | 1,133 | 1,184 |
| 昭和35年 | 341 | 1,965 | 931   | 1034  |
| 昭和40年 | 355 | 1,905 | 938   | 967   |
| 昭和45年 | 360 | 1,781 | 859   | 922   |
| 昭和50年 | 381 | 1,866 | 919   | 947   |
| 昭和55年 | 409 | 1,920 | 956   | 964   |
| 昭和60年 | 498 | 2,195 | 1,117 | 1,078 |
| 平成2年  | 536 | 2,370 | 1,206 | 1,164 |
| 平成7年  | 558 | 2,490 | 1,251 | 1,239 |
| 平成12年 | 649 | 2,618 | 1,318 | 1,300 |
| 平成16年 | 791 | 2,666 | 1,314 | 1,352 |
| 平成17年 | 804 | 2,657 | 1,323 | 1,334 |
| 平成18年 | 820 | 2,649 | 1,309 | 1,340 |

歴代二川町長

| 代  | 氏名    | 在任            |
|----|-------|---------------|
| 1  | 朝倉常治  | 明39.10 ~ 43.8 |
| 2  | 近藤栄作  | 明43.8 ~ 大6.9  |
| 3  | 前田桂次郎 | 大6.9 ~ 8.3    |
| 4  | 朝倉常治  | 大8.4 ~ 12.4   |
| 5  | 福井金之丞 | 大12.4 ~ 13.7  |
| 6  | 前田桂次郎 | 大13.8 ~ 15.11 |
| 7  | 野口丈太郎 | 大15.11 ~ 昭2.3 |
| 8  | 前田豊平  | 昭2.3 ~ 3.10   |
| 9  | 岡田堅哉  | 昭3.10 ~ 5.2   |
| 10 | 佐原啓次郎 | 昭5.3 ~ 5.6    |
| 11 | 野口丈太郎 | 昭5.7 ~ 9.7    |
| 12 | 福井金之丞 | 昭9.7 ~ 11     |
| 13 | 村田豊平  | 昭11 ~ 13      |
| 14 | 戸田伊兵衛 | 昭13 ~ 15      |
| 15 | 山本茂   | 昭15 ~ 21      |
| 16 | 福井金之丞 | 昭21 ~ 22      |
| 17 | 加藤周藏  | 昭22 ~ 25      |
| 18 | 陶山要作  | 昭25 ~ 26      |
| 19 | 村田丹次  | 昭26 ~ 30      |

小沢校区町総代 (○印は校区総代)

|       | 寺沢町    | 小松原町  | 小島町    | 富士見町  |
|-------|--------|-------|--------|-------|
| 昭和30年 | 金子 健   | 中川 極  | ○伊藤 静雄 | 伊藤友三郎 |
| 31    | ○白井 鎮治 | 森長 正人 | 白井 茂雄  | 北村 忠吉 |
| 32    | 幾田 雅治  | 中川喜久治 | ○朝倉 克己 | 白井 勇  |
| 33    | 鈴木 喜三  | 金子 梅夫 | ○朝倉 千秋 | 金子 易代 |
| 34    | 金子 六郎  | 鈴木 哲  | ○富田 武雄 | 鈴木 操  |
| 35    | 幾田 誠   | 鈴木 好穂 | ○小池 清  | 彦坂 秀雄 |
| 36    | 金子 深   | 鈴木 貞  | ○戸田 一次 | 鈴木 春光 |
| 37    | 大林 登   | 神谷 実男 | ○朝倉 芳水 | 八木勇三郎 |
| 38    | 金子 富美  | 金子 幸男 | ○白井 務  | 村田 彦雄 |
| 39    | 近藤 久男  | 金子 好行 | ○朝倉 厚司 | 萩原 政一 |
| 40    | 土井 敏秀  | 鈴木 徳治 | ○伊藤 初二 | 鈴木 英夫 |
| 41    | 金子 一美  | 金子 久  | ○朝倉 九郎 | 大竹 政寿 |
| 42    | 金子 正明  | 鈴木 泰  | ○白井 茂秋 | 大橋 秀一 |
| 43    | 金子 友房  | 鈴木 幸雄 | ○朝倉近太郎 | 金子 守夫 |

|    |        |       |        |                  |
|----|--------|-------|--------|------------------|
| 44 | 金子 勝美  | 鈴木 敏晴 | ○伊藤 栄一 | 朝倉 敏明            |
| 45 | ○金子 易代 | 石田 春男 | 朝倉 章   | 大林 政経            |
| 46 | 金子 政美  | 鈴木 繁一 | ○陶山 静馬 | 立岩 信義            |
| 47 | 金子 明夫  | 森長 弘  | ○伊藤 由己 | 朝藤 勝美            |
| 48 | 近藤 正   | 鈴木 政俊 | ○朝倉 孝夫 | 西川 守治            |
| 49 | 近藤 忠義  | 鈴木 邦夫 | ○朝倉 清  | 市川 敏夫            |
| 50 | 幾田 卓二  | 鈴木 梅雄 | ○富田 正  | 国島 清光            |
| 51 | 白井 広二  | 本馬 助吉 | ○白井 潔  | 鷺坂 芳人            |
| 52 | 金子 喜勇  | 神谷 松夫 | ○伊藤 忠司 | 原田 繁生            |
| 53 | 金子 俊一  | 鈴木 浅雄 | ○朝倉 功  | 宇野 正和            |
| 54 | 金子 清秀  | 中野 徳夫 | ○朝倉 敏生 | 大林 元久            |
| 55 | 伊藤 良一  | 森長 学  | ○朝倉 恒一 | 原田 諭             |
| 56 | 近藤 政明  | 森長 正彦 | ○白井 義夫 | 市川 敏夫            |
| 57 | 近藤 隆之  | 神谷 巖  | 伊藤 嘉人  | ○金子 年            |
| 58 | 金子 一衛  | 中川 祐一 | ○戸田 博  | 金子 賢次            |
| 59 | 金子 克明  | 鈴木 敏充 | ○白井 芳衛 | 国島 清光            |
| 60 | 土井 利允  | 中川 恭欣 | ○鷺坂 初夫 | 村田 昌穂            |
| 61 | 金子 裕己  | 鈴木 近司 | ○伊藤 政男 | 加藤 宏治            |
| 62 | ○小笠原聖典 | 鈴木 正勝 | 朝倉 英幸  | 大竹 元一            |
| 63 | 金子 文男  | 鈴木 祥仁 | ○陶山 昭五 | 中村 謙元            |
| H元 | 金子 勤   | 鈴木 宏次 | ○伊藤 文夫 | 土屋洋二郎            |
| 2  | 近藤 敏雄  | 鈴木 淳  | ○朝倉 幹雄 | 彦坂 美一            |
| 3  | 金子 安夫  | 金子 信之 | ○白井 輝  | 村田 敏男            |
| 4  | 幾田 徳保  | 中川 佳一 | ○朝倉貞次郎 | 堂下 敏喜            |
| 5  | 金子 菊支  | 金子 等  | ○伊藤 宏光 | 金子 昌功            |
| 6  | ○幾田 哲夫 | 森長 友幸 | 朝倉 茂雄  | 鷺坂 宜則            |
| 7  | 金子 光佳  | 金子 工  | ○朝倉 琢美 | 市川 静雄            |
| 8  | 金子 春夫  | 鈴木 康治 | ○朝倉 憲吾 | 山田 幸男            |
| 9  | 金子 政弘  | 鈴木 健司 | 朝倉 義久  | ○朝藤 芳治<br>(八木敏夫) |
| 10 | 金子 尚弘  | 鈴木 勝三 | 朝倉 澄   | ○朝藤 芳治           |
| 11 | ○金子 幸徳 | 鈴木 孝始 | 陶山十七三  | 鈴木 忠司            |
| 12 | 近藤 芳広  | 鈴木 伸好 | ○朝倉 正明 | 大林 孝             |
| 13 | 渡邊 忠雄  | 鈴木 明  | 白井 則明  | ○大林 政人           |
| 14 | 村野 光幸  | 森長 高男 | 朝倉 敏行  | ○羽田 英一           |
| 15 | ○金子 康德 | 鈴木 茂臣 | 白井 和充  | 杉浦 正志            |
| 16 | 増井 康二  | 鈴木 克佳 | ○伊藤 勝章 | 高橋 修一            |
| 17 | 近藤 立生  | 中川 正由 | ○戸田 政克 | 鈴木 康次            |
| 18 | ○金子 政敏 | 鈴木 良二 | 朝倉 康文  | 金田 正司            |

# 第3章 小沢の産業

## 1 産業別人口

昭和30年頃までは半農半漁の世帯が多く、第1次産業人口が大部分を占めていた。しかし、その後の経済変動により漁業は衰退の一途をたどった。

全国的な第1次産業人口減少の波はこの地方にも押し寄せ、後継者の農業離れの傾向がみられ、兼業農家が激増している。しかし、下図のように、世帯・人口ともに農業の占める割合がほぼ60%と依然として高く、製造業・建設業・サービス業と続くが、その数は極めて少ない。

他産業との所得の格差、米の減反政策、農産物の輸入自由化、国民の食生活の変化など農業の直面している問題は多い。

### 農家人口と総農家数の推移

| 年 度   | 農家人口   | 総農家数 |
|-------|--------|------|
| 昭和45年 | 1,497人 | 282戸 |
| 50年   | 1,397  | 271  |
| 55年   | 1,337  | 260  |
| 60年   | 1,370  | 254  |
| 平成2年  | 1,295  | 237  |
| 7年    | 1,177  | 226  |
| 12年   | 1,117  | 210  |

| 年 度   | 専業農家数 | 第1種兼業農家数 | 第2種兼業農家数 |
|-------|-------|----------|----------|
| 昭和45年 | 130戸  | 111戸     | 41戸      |
| 50年   | 126   | 88       | 57       |
| 55年   | 108   | 81       | 71       |
| 60年   | 109   | 68       | 77       |
| 平成2年  | 111   | 57       | 69       |
| 7年    | 87    | 62       | 77       |
| 12年   | 77    | 68       | 50       |

## 2 農業

### (1) 移り変わり

小沢地区の土地は洪積台地で、赤褐色の酸性土壌のため畑作が難しく、さらに、地形は非常に起伏に富んで耕地は多くなかった。また、かんがいはため池や井戸水を利用したが、水源が乏しいために干ばつの被害が大きかった。

明治14年、村の北方の大地の大部分が、陸軍用地として買いあげられたため、豊橋や二川の町から疎外された。そこで、漁業を中心として生計をたて、農業は細々と営んでいた。

明治以降、全国的な産業復興とともに農業のあり方が模索され、農業指導者を招いて振興策がはかられた。

第2次大戦後、校区北部の軍用地が解放され、耕地や道路が整備された。また、化学肥料・品種改良・土地改良・豊川用水の通水により、夏は西瓜・メロン、冬はキャベツ・大根・白菜などの栽培が盛んに行われるようになった。最近ではハウスでの施設園芸農家、肉牛・乳牛・養豚・養鶏などの畜産農家も多くなった。

### (2) 今日の農業経営

校区は、小島・小松原・寺沢・睦美・比留茂・縄口の6地区から成っている。小島・小松原・寺沢は古くからの集落で、豊橋農協第一事業所の管内である。一方、睦美・比留茂・縄口は開拓地区で、豊橋農協第八事業所に属している。

農家数は、年々減少傾向にあるが、市内の他地域に比べれば減少率はまだ低い。専業農家は昭和45年46.1%と高率を示していたが、兼業農家が年々増加傾向にあり、特に第2種兼業農家は激増しており、昭和45年以降10年間で約2倍近くになった。

生産基盤である耕地は昭和45年総面積で約410haであったが、平成12年には約310haに減少している。1世帯あたりの平均経営耕地面積は1.4haで、1.0ha～2.0haの規模の農家が全体の30%と最も多く次いで0.5ha～1.0haと2.0ha～3.0haが17.6%である。5.0ha以上の農家は3戸である。

1世帯あたりの農業従事者は兼業化が進むにつれて高齢化の一途をたどり、男女ともまったく同じ比率である。年齢別では、30才～59才の割合が極めて高く、60才以上の比率も高い。逆に、30才未満の若年従事者の割合が低い。

### (3) 畑作

**野菜の栽培** 耕地面積の約65%は畑地である。畑作物では、野菜の作付面積が大部分を占め、野菜中心の農家が約40%である。

春から夏にかけては、露地メロン・琉球冬瓜・玉ねぎ・スイートコーンの栽培が中心である。豊川用水通水以後、西瓜・メロン・トマト類の栽培が特に盛んになり、最近では、ハウス栽培によるトマトを作る農家が増えた。今後は、土地に合った品種や栽培方法を研究していく必要がある。

秋から冬にかけては、キャベツ・白菜などの栽培が中心である。冬野菜は夏野菜に比べて手間がかからないが、価格の変動が激しいという問題点がある。そのため最近では、サニーレタス・ブロッコリーなどの洋菜を栽培する農家が増えている。

各農家で収穫された作物は、豊橋農協第一

事業所や第八事業所へ出荷される。これらの作物は、個人やグループで市内や近郊の市場へ直接出荷されることもある。

農協に集荷された作物は、各事業所から京浜・中京・阪神などの大消費地の市場へ出荷される。おもに夏野菜は名古屋を中心とした中京地方に出荷され、冬野菜のうちキャベツは京浜地方、白菜は京阪神地方への出荷量が多く、作物により出荷先が多少異なっている。

以上のように、校区の近くにも市場があり、京浜・中京・阪神など大消費地への交通も便利であるという地理的条件や温暖な気候条件に恵まれ、野菜栽培が盛んに展開されている。

**梨の栽培** 校区の特産物は梨である。大正の初め頃取り入れられた梨栽培は、昭和40年頃まで作付面積・農家戸数ともに増加を続けた。

赤土の台地と温暖な気候は、梨の成育に適している。そのため、小島町を中心として梨作りに力を入れ、「小島梨」として市内はもとより、広くその名を知られるようになった。

梨栽培の仕事は、秋から冬にかけての土起こし・元肥に始まり、整枝せん定（不要な枝を刈り込んで木の形を整える作業）が行われる。春になると、人工交配・摘果・袋かけ・消毒を行い、梨の実は成長していく。そして、収穫前に追肥や水かけを行うと、品質の良い梨になる。7月の下旬になると、長寿・幸水などの早生品種の出荷が始まる。8月中旬から豊水が出荷され、9月中旬から10月中旬の新高が次々と出荷されている。

最近では作業の機械化が進み、トラクターやスプリンクラーなどの一般的な農業機械・設備をはじめ、選果機・スピードスプレー（消毒の機械）・やく採取器・爆音機（爆音で鳥害を防ぐ）・ほうが燈（夜蛾の害を防ぐ）など果樹栽培専用の多くの機械・設備が導入され、省力化・品質向上が図られている。また、温室によって梨の促成栽培をしている農

家もある。

農協への出荷率は低く、個人やグループで直接、市内や浜松など近接した市場へ出荷したり、国道42号線沿いの直売所で販売している。

梨栽培は台風の影響を受けやすく、畑の周辺には防風林を植えているが、収穫時期の台風は梨栽培農家にとっては悩みの種である。最近では、野菜栽培に切り替えていく農家もある。



梨畑

**施設園芸** ビニルハウス・ガラス温室などの施設を利用する農家が、増加する傾向にある。渥美半島にみられるような施設専作農家は少なく、施設の面積は、11haで露地と施設を兼ねている農家も多い。

多くの農家は、春から夏にアールスメロン、秋から冬にえんどう、周年でミニトマトを栽培している。また、カーネーションなどの花卉や、セントポーリア、ベンジャミナなどの観葉植物、梨なども栽培している。

施設園芸作物のうち、ミニトマト・えんどう・アールスメロンは農協に出荷され、大都市の市場へ輸送されている。しかし、他の作物は栽培農家が少なく、個人で市場へ輸送したり、市場から直接各農家に集荷に来たりしている。

**みかん・茶の栽培** みかん栽培農家は以前30戸以上を数えたが、現在は数戸にすぎない。梨栽培の広まりとともに、みかん栽培も普及

したが、多くの障害にぶつかった。近くに三ヶ日・蒲郡と全国的に名の知れたみかん産地があり、これらの地域とは味・品質ともに競争ができない。良質のみかんを生産するには多くの肥料や手間を施さなければならない。また、梨と同じように台風の被害を受けやすい。そこで、他の作物に転換する農家が増えた。しかし、夏季の梨・冬季のみかんと果樹専作をしている農家もある。

茶栽培農家も現在数戸である。昭和30年頃から、商品価値の高い茶の栽培が奨励され、麦から茶に転作する農家が増えた。摘みとり方法は、1人用手動から1人用バッテリー、2人用動力と機械化され、農家が製茶まで行う。3月上旬から11月上旬まで防除作業・施肥作業が何度も繰り返され、5月上旬の1番茶から10月下旬の4番茶まで摘みとられる。最近では価格の高いやぶきたの栽培に力を入れている。

#### (4) 米作

田のある農家数は138戸あるが、稲を作る農家は126戸である。耕地面積のうち水田の占める割合は約23%にすぎず、米作を主体にしている農家は少ない。

台地であるため水の便が悪く、土地の起伏も激しいために水田には適さない土地が多かった。それでも、主食・換金作物としての米の魅力は高く、悪条件の中でも米作に力を入れてきた。しかし、昭和45年に国は蓄積する余剰米対策として農家に休耕・転作を奨励した。校区においては、約60haの水田を減反した。また、昭和47年から55年にかけて行われたパイロット事業により、海岸付近に点在した約20haの水田が畑地に変わった。したがって、校区の米作は一層小規模化した。

しかし、土地改良・ライスセンターの建設や田植機・バインダー・コンバインなどの機

械化を図ったりしている。以前に比べて米作が省力化されたことにより、自給用や販売用として現在も米の地位が保たれている。また、畜産農家では多くのわらを必要とするために、米作に力を注いでいる農家もある。

## (5) 畜産

昔は農家の副業としてわずかな鶏や豚を、農作業用として牛を飼育していた。校区において本格的な畜産農家がみられるようになったのは、昭和30年以降である。以後農家数・家畜数ともに増加してきた。しかし、最近では家畜数は増えているが、農家数は減少している。畜産農家はそれぞれに幾多の問題をかかえている。

**肉牛** 肉牛農家のうちで専業で行っている農家は約半分で、50～250頭を飼育している。生後20日～1か月の子牛を酪農家や農協・家畜商から購入したり、北海道産の生後8か月～10か月の牛を農協を通して購入したりしている。18か月～20か月まで飼育された牛は農協を通して出荷される。飼料代、元牛代などには莫大な費用を必要とするため、野菜栽培へ切り替える農家も増えている。

飼料はとうもろこし・マイロ・大麦・大豆かす・わら・牧草などである。生の牧草は牛の肉質を悪くするために、乾燥させたものを与える。牧草を栽培するには大型機械を必要とし手間がかかるために、肉牛農家の多くは自給していない。飼料は大部分が輸入品にたより、飼料自給率は低い。

牛肉の輸入自由化・飼料代の高騰・BSE問題など肉牛農家の直面している問題は多い。

**酪農** 校区で酪農が始められたのは昭和30年頃である。細谷にはすでに数人の酪農家がいいて、後に小沢校区にも導入されてきた。以前は数頭の飼育であったが、現在では大規模経営をしている農家が多い。

酪農は他の畜産に比べて飼料の自給率が高く、トラクター・ディスクモア（牧草を刈る機械）・テッター（反転）・ベラー（梱包）などの大型機械を所有し、牧草を栽培する農家が多い。牧草は生や乾燥させたものを他の飼料とともに与える。

1頭の乳牛から1日平均20kgの乳がとれるといわれている。最近では作業が機械化され、パイプラインやラインクリーナーにより、衛生的・能率的に朝夕2回搾乳されている。そして、バルブクーラー（乳を冷やすタンク）に保存され、酪農組合のタンクローリーにより1日おきに集荷されている。

牛舎や搾乳・飼料の生産、汚物の処理などの機械化により労働条件が改善され、飼育頭数が多頭化している。しかし、大型機械・設備の導入・輸入飼料の高騰による支出の増加などの多くの問題をかかえている。

**養豚** 養豚も小規模経営からスタートし大規模経営化している。昭和50年ごろから専業化する農家が増えてきたが、逆に野菜栽培中心に切り替えていく農家もある。

豚は年に2・3回出産し、1度に10匹前後、年間20匹～30匹の子豚を生む。子豚出産農家は2か月の子豚を出荷し、一貫経営農家では6か月～7か月、体重110kgになるまで飼育する。最近では子豚生産だけでは採算が合わないようになってきた。

飼料は、とうもろこし・大豆油かす・魚粉・麦などを混ぜた配合飼料を用いている。また、自家製の飼料や水も常時与えられている。

大規模・専業化した農家では省力化がすすめられ、豚舎内の施設は機械化されている。自動的に飼料を与えたり、ベルトコンベアーで糞を豚舎外に運んだりしている。

豚肉消費の伸び悩み・輸入配合飼料の高騰・汚物の処理などの問題があるが、多頭

化・専門化により大規模経営化する傾向にある。

**養鶏** 副業的な庭先養鶏から専門化しはじめたのは、昭和40年頃である。飼育数は養鶏を専業とする農家は、10,000羽以上でないとし計が成り立たないといわれている。

かつては国内産の白色レグホーンが多かったが、最近では産卵率の高い（10日で8.5～9個）外国産のシェーパー・バブコックなどを飼うようになった。飼料は、とうもろこし・マイロ・カルシウム・リンなどの配合飼料を用いる。飼料代は徐々に上昇しているが、他の畜産飼料より安定している。飼料や鶏卵などの購入・販売は、農協を通して行われている。

養鶏農家はニューカッスル病や細菌性の伝染病を防止するため、2・3か月毎にワクチンを与えている。35年ほど前にはニューカッスル病が流行し、大量の鶏に伝染した。

小沢の養鶏は全般的に副業的であり、鶏卵の価格の頭打ち・後継者不足などにより農家数が減少している。

**うずら** 豊橋は養鶏の盛んな地域で、全国の過半数が飼育されている。交通が発達し大消費地に近いこと、気候が温暖で養鶏に適していることが要因である。また、元来養鶏が盛んな地域で、関連産業として飼育器材業者が多いことも養鶏を発展させた。

## (6) 豊川用水とパイロット事業

**豊川用水** 東三河および西遠地方は、気候が温暖なうえに産業立地条件にも恵まれていた。しかし、水源に乏しいために、しばしば干害を受け農業経営は立ち遅れ、農業経営は不振な状態にあった。豊川用水事業は、この地域に新たに水資源を開発し、農業用水を確保するとともに、既存のかんがい施設を整備し、新時代に即応する農業経営の画期的改善を図

ろうとするものであった。また、工業用水・水道用水をも確保し、本地域の総合開発を図った。

昭和2年に農林省の「大規模農業水利調査」計画として初めて取りあげられたこの事業は、水源地宇連ダム建設工事完成（昭和33年）・二川サイフォン完成（昭和40年）・小沢地区一部通水開始（昭和41年）と続き、昭和43年全線が完成した。受益面積は畑地かんがい9,800ha、水田関係10,400haで、関係4市7町の畑地の75%に通水された。このことにより、水が安定的に確保され、多角的な水田経営だけではなく、新しい畑作農業・施設園芸・畜産経営など、合理的・効率的に生産性の高い農業が展開されるようになった。

校区においても、豊川用水の通水は農業を一変させた。それまでは、さつまいも・麦類など比較的日照りに強く、酸性土壌でも成育する作物が中心であった。通水後は豊富な水を利用して、野菜栽培や施設園芸・畜産などに推移していった。豊川用水の通水はかんがい用水の確保にとどまらず、農作物の変化や機械・設備の近代化をも可能にし、土地と労働の両面で高い生産性が実現され、近代的営農が展開されるようになった。

**パイロット事業** 豊川用水の通水により農業用水は確保されたが、海岸付近の土地は、点在する狭少な耕地と山林のままであった。

この土地を整備しようと計画されたのがパイロット事業（土地改良試行事業）である。昭和47年から55年にかけて、総工費14億円の予算で県営事業として行われた。費用は国（65%）、県（17.5%）、市・地元（87.5%）にそれぞれ分担され、地元負担については、各農家が国から資金を借り、25年で償還することになっている。

この事業により海岸付近の風景は変ぼうし、寺沢・小松原・小島合わせて約78haの土地が

畑地に変わった。以前は山林であり、海岸にも近いために、パイロット事業によって拡張された耕地は起伏や傾斜があり、海からの風によって塩害も受けやすい。しかし、アスファルト道路も整備された広い耕地は、野菜栽培・施設園芸・牧草地など多岐にわたって利用されている。

### 3 漁業

#### (1) 移り変わり

戦前までは漁業が盛んで、校区の中心産業であった。しかし、戦後漁獲高の不振により、漁業だけでは生計を立てにくくなり、徐々に漁業は衰退していった。それでも、昭和25年頃までは、各部落には網があり（小島2網・小松原1網・寺沢2網）、とれたばかりの鮮魚はトラックで豊橋市場へ、小さいものは加工して出荷していた。大漁が続いた時は、浜の砂はいわしで埋めつくされ、加工しきれずにそのまま浜で干して、農業用肥料として利用された。しかし、当時の豊漁の年でも20,000円程度であり、半農半漁から農業主体へと形態を変えていった。（昭和25年1月、米1kg 44.5円）

さらにその後、全国的な高度経済成長の時代をむかえ、産業構造が変化し、農業は品種改良・土地改良・機械化・豊川用水の通水など、さまざまな対応策が講じられ発展していったが、漁業は立ち遅れ衰退の一途をたどっていった。

#### (2) 観光地引網

産業としての漁業は校区からは姿を消してしまっただが、昭和50年頃から観光地引網として復活し始めた。そして、現在、10数人の地引網グループが小島に2網、寺沢に1網ある。各網とも漁業の好きな仲間の集まりで、農業

をするかたわら観光地引網を行っている。

夏を中心として春から秋にかけて地引網の依頼があり、市内はもとより、遠くは尾張地方からもやって来る。集団で声をかけ合いながら網を引いたり、サバ、コノシロ、イワシなどの新鮮な魚を海岸で料理して食べたりする観光地引網は、会社や子ども会などのレクリエーションとして好評を博し、依頼件数は年々増加している。しかし、校区において観光地引網はあくまでも農業の副業で、収入を増やすために宣伝したり、規模拡大を図ろうとする働きは全くなく依頼があれば、それに応じる程度で顧客が多い。

保険・漁業権・船外機の免許状・地引網代などの事務は漁業会に加入して、統一を図っている。

最近の全国的なレジャー化により、小沢においても、夏の土曜・日曜をピークとして年間、サーフィン・つり・ドライブ・観光地引網などの観光客が後を立たず、小沢の海の様相は著しく変化した。



観光地引網

## 第4章 教 育

### 1 学制頒布以前の教育

教育機関ト称スヘキモノナシ。只大字小松原東観音寺住職鈴木衣山和尚ハ、法務ノ傍ラ好テ子弟教育ニ従事セラレタルヲ以テ、近傍ノ村落ヨリ通学教授ヲウケタルモノ甚タ多カリキ。又其頃ハ各村落ニモ一、二ノ物識古老アリテ、父兄ノ依頼ニヨリテ自宅ニ集メテ初等ノ教育ヲナシタルモノアリタリ。科目ハ専ラ書方（習字）読方（素読）トヲ教授セリ。素読ノ教科書トシテハ、百姓往来、四書五経、十八史略、文章軌範ニ及ヒタルモノアリ。書方ノ手本トシテハ専ラ師匠ノ自書シタルモノヲ用ヒタリ。

—昭和3年起 郷土地誌より—

### 2 小沢小学校の歩み

明治6年3月 小島義校

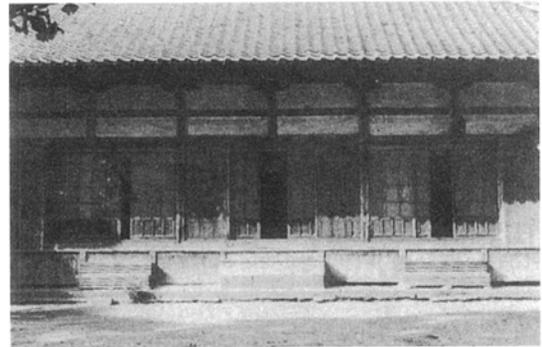
小島大応寺内に設く。小島の人伊藤寛斎を聘し初等教育を始む。  
(小島、小松原、寺沢の児童)

明治6年12月 9番小学細谷学校

上細谷宝聚庵に設く 学区改正により合併（上下細谷、小島義校）

明治7年2月 9番小学細谷学校分教場

小島大応寺内（小島、小松原、寺沢）通学の不便から分教場を設く



小島義校（小島町大応寺本堂）

明治11年3月 26番27番小学小島学校

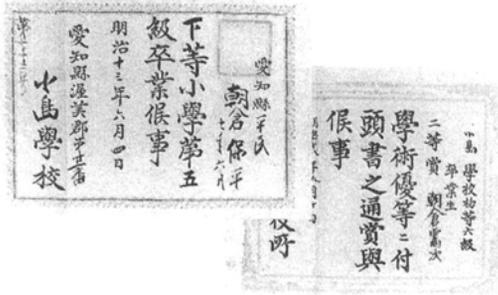
大応寺内、次に普門庵跡 学区改正とともに細谷から分離  
この年の学校経費は、年226円62銭、教員は伊藤寛斎、柱勇蔵先生の2名、生徒数は60名であった。

明治11年8月 27番寺沢学校

東漸庵、次に郷中、寺沢分離

明治13年7月 17間×4間半の校舎一棟完成

村内鈴木喜平次、伊藤善右エ門、朝倉清右エ門の率先尽力による。工費およそ1,000円。有志より寄附金を募り、其の筋の許可を得て完成す。この新築費寄附金者に対し県庁より木杯、銀杯が贈られる。尚、朝倉清右エ門は、本校創立以来、教育のため尽力顕著をもって文部省より硯箱、賞状が授与される。



- 明治20年4月 尋常小学小島学校  
 普門庵跡（細谷上下、小沢、寺沢）21年、細谷分校を宝聚庵に設く
- 明治26年7月 小沢村立小島小学校  
 一村一校の折合がつかず二校を設く  
 小沢村立小沢小学校  
 寺沢南五本松 小島学校より買受けた校舎を移築
- 明治27年1月 小沢村立小島尋常高等小学校  
 小島町字13本  
 校舎二棟、便所、住宅落成  
 明治天皇、皇后両陛下の御真影奉戴
- 明治36年4月 小沢村立小沢尋常高等小学校  
 小島町荒巻の現在地  
 校舎一棟移転落成  
 新築校舎一棟（25間半×4間半）



明治36年の学校行事

- 4月7日 授業後3・4年生を使い、凡そ1時間大掃除法を行う。元の校舎の手入れを怠り塀破れ、屋根漏り、不潔甚しきによってなり。
- 4月27日 御真影奉還につき午前10時授業終業、出発準備。午前11時、職員生徒一同小島本校へ行き、12時、両校職員生徒打揃い、縄口峠にて奉迎す。
- 4月30日 明日より奥山へ修学旅行の旨告げ、生徒1人20銭を徴収す。そのため1・2年生は、2日間休校すべき旨おも併せて告知する。
- 6月29日 本日より7月4日まで、1週間に至る田植え臨時休業の旨生徒に告知。
- 7月9日 朝来大雨に加え風強く、窓の隙より吹きこむ雨は教室に流れて川になってしまった。
- 7月18日 明后20日よりその暑さ厳しい時は、3・4時の授業中止の旨通知ありたり。  
 （当時の夏休みは、8月1日より8月31日）
- 10月6日 午前6時、赤沢原にて砲兵射撃観賞のため出発。尋常科3年以上高等科生までを引率、4時に帰校。当日は生徒の鑑賞余程多く、豊橋高等、大崎、磯辺、杉山等の諸校もあり。
- 10月18日 18連隊練兵場において、小学校創立30年祝賀渥美郡連合運動会を執行、午後6時12分の汽車にて帰校。

3月24日 免状授与式を行う。

来賓参列者は、村長、学務委員  
3名。

明治40年3月 二川西部尋常高等学校  
町村合併のため名称変更

41年、旧寺沢学校校舎を5本松  
より移転校舎坪数260、運動場  
800、学級6、児童数237

この年の教員給与は、校長24円、  
正教員16円、代用教員12円、学  
校諸経費1,303円。

明治42年4月 二川西部尋常小学校

二川高等小学校設置につき高等  
科廃止

明治44年6月14日 この日より3日間、村社  
祭礼にて、学校は臨時休業とな  
る。

大正元年5月3日 遠足運動を行う。3・4  
年生56名は塩見坂方面。5・6  
年生103名は浜名湖。

8月23日 軽重兵1ケ大隊行軍の途次、  
宿舎として本校校舎を使用する。  
以後昭和20年の終戦まで陸軍の  
行軍演習にしばしば使用する。

大正3年10月6日 秋季遠足運動として、天  
白原における野砲第21連隊の実  
弾射撃を参観。

大正4年4月12日 夜、養鶏講習会の会場と  
して校舎貸与

10月7日 桑園研究会のため校舎貸与

大正4年 御大典記念として、築山、泉  
水を築造

大正6年 二川高等小学校2教室、湯含  
場一棟、住宅一棟

移築竣工 校舎坪数205

大正6年11月3日 第1部落連合運動会を高  
師原練兵場に於て挙行。3年以上  
参加。午前7時出発、午後6

時に帰校する。この頃螟虫採集  
を授業日の午後しばしば行う。  
螟虫卵採集7万252匹、ヒメゾ  
ウ虫（桑ノ木害虫）3万252匹、  
学校はその報酬として30円受け  
とる。

（螟虫とは稲につく害虫。手が  
足りないので生徒を動員した。  
昭和10年頃までつづく。）

大正7年4月 二川町西部尋常高等学校

二川高等小学校廃止につき高等  
科併置

二川町西部実業補習学校併置  
学級数8、児童数304



明治41年 二川西部尋常高等小学校高等科卒業生

大正8年 北校地拡張500坪。農舎増築  
大正天皇、向郷両陛下ご真影奉  
戴

昭和3年3月 裏校舎新築。校舎坪数407、  
学級数8、児童数277、旧校舎  
小島公会堂へ

昭和4年4月 高等科複式となる

昭和6年4月 5・6年複式となる（1年間  
のみ）

昭和7年7月 奉安殿落成

昭和8年 皇太子殿下ご降誕記念、農園  
開墾9畝

昭和9年 忠魂碑建設、運動場拡張  
（門前農地つぶす）

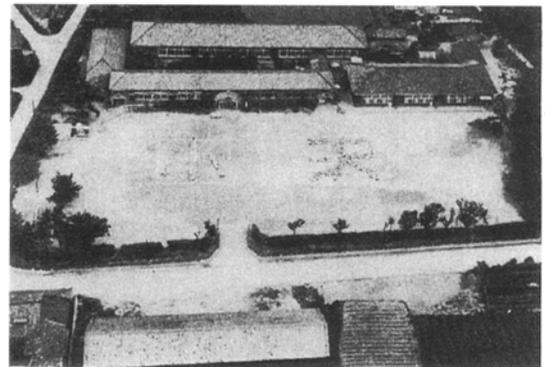
運動場坪数1,040、桜樹植栽  
 記念農園 9 畝、梨園2.5畝 (作物)  
 昭和10年 記念農園開墾 1 反  
 昭和11年 記念農園開墾 9 畝  
 昭和12年 高等科複式廃止 学級数 8、  
 児童数300、職員 9  
 昭和16年 4 月 二川町西部国民学校  
 貯水井戸設置 (校庭現存のもの)  
 昭和21年 8 月 奉安殿、忠魂碑撤去  
 昭和22年 4 月 二川町立西部小学校  
 学制改革により高等科廃止 学  
 級数 7、児童数299  
 校舎一棟、五並中学校へ移転  
 給食室 (調理室、炊事室10坪)  
 建築  
 校舎357坪、運動場1,040坪、学  
 級数 7、児童数312、職員 9  
 昭和24年 1 月 校舎北裏、風よけ立木伐栽  
 ピアノ購入。簡易水道設置



二川町西部国民学校当時の勤労風景

昭和27年10月 校地西側立木伐採し土手を作  
 る  
 昭和28年 1 月 玄関車廻し撤去  
 9 月 軽楽器購入  
 昭和29年 3 月 歴代校長写真掲示  
 8 月 二宮金次郎像建立  
 昭和30年 3 月 豊橋市小沢小学校  
 豊橋市に合併したため校名変更  
 7 月 新校舎 3 教室、土間、便所竣

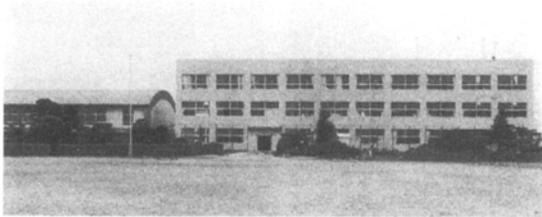
工 (155万円)  
 昭和31年 2 月 講堂緞帳一式寄贈 — 小沢  
 梨組合婦人会  
 8 月 給食調理室竣工  
 10月 「小沢の子」のうたできる  
 作詩 西川喜一 作曲 中村隆浩  
 昭和32年 4 月 旧校舎と新校舎の渡り廊下竣  
 工  
 職員室東側の物置を改装し宿直  
 室とする。従来の宿直室は、用  
 務員の住込み専用とする。  
 昭和33年 4 月 校舎南西の土手10坪、県に譲  
 渡  
 10月 校舎東側竹藪雑木敷地40坪を  
 整地  
 昭和35年 5 月 職員住宅を処分し校地とする  
 昭和36年 3 月 新校舎 3 教室、便所竣工  
 4 月 前校舎、西校舎を取りこわし  
 運動場に拡張  
 5 月 二宮金次郎像移転  
 西通用門、正門設置 (旧正門し  
 め切り)  
 昭和37年 6 月 旧用務員室、便所、物置、農  
 舎老朽のため売却  
 8 月 校舎増築 3 教室、倉庫、玄関、  
 来賓便所、手洗い竣工  
 12月 給食調理室、用務員室、宿直  
 室改築



昭和35年の校地・校舎

- 自転車置場、給食倉庫改築  
普通教室、宿直、用務員室、応接室、保健室配置転換
- 昭和38年2月 中庭造園、淡水魚池築造  
7月 手洗場、足洗場新設  
9月 電話開通
- 昭和39年4月 プール建設地鎮祭
- 昭和40年3月 プール深井戸建設(400万円)  
4月 学校林補植作業
- 昭和41年7月 校内放送設備改善(7万円)  
鼓笛隊編成、大太鼓等購入(8万円)  
ベルタイマー寄贈(8万円)
- 昭和42年2月 岩石教材園完成(24万円)  
4月 学習指導、体育研究指定を受ける
- 昭和43年2月 給食調理室、宿直室、渡り廊下新設(10万円)  
5月 テレビ1台、雲梯1基寄贈  
応接セット寄贈(4万円)  
8月 遊具、体育器具整備(50万円)  
10月 研究指定、体育研究発表会  
12月 学校用水として五並水道取り入れ
- 昭和44年2月 鉄製バックネット新設  
5月 温室撤去。半円三段式花壇作成  
8月 体育館建設用地買収
- 昭和45年1月 教室照明取り付け(5万円)  
10月 体育館起工式
- 昭和46年1月 運動場防球フェンス設置  
3月 体育館竣工式  
12月 学校警備機械設置
- 昭和47年1月 体育館用グランドピアノ寄贈(46万8千円)
- 昭和48年3月 学制発布100年記念、楠10本植樹  
校訓「たくましい子」額寄贈
- 昭和49年3月 プール浄化槽設置
- 昭和50年5月 鉄筋校舎起工式(第1期)  
北校舎2教室、便所、遊具取りこわし  
8月 職員室、放送室、理科室移転  
11月 南校舎4教室取りこわし  
12月 鉄筋校舎3教室、小教室2、昇降口、便所、階段竣工
- 昭和51年5月 鉄筋校舎起工式(第2期)  
10月 南校舎、放送室、職員室移転、取りこわし  
12月 校舎竣工式
- 昭和52年5月 芝生園造成  
11月 第1回浜っ子活動開始  
12月 本校2年担任、中神待子先生ご逝去
- 昭和53年2月 子どもの広場造園  
校旗寄贈(同窓会)
- 昭和53年9月 国旗掲揚塔立替工事  
運動場用大時計寄贈  
バトン、パレード用ユニフォーム寄贈(PTA)
- 昭和54年2月 「小沢の子ども」発刊  
4月 鉄筋校舎第3期工事のため、木造校舎(音楽室、図工室)取りこわし  
5月 指定家庭教育学級第1回開始  
鉄筋校舎起工式(第3期)  
10月 鉄筋校舎3教室竣工
- 昭和55年5月 郷土社会学習参加(4年生)  
生産学習のため、東観音寺より田畑借用  
10月 校区市民館建築のため、体育倉庫、便所取りこわし
- 昭和56年1月 校舎建設用地(東側梨畑)買収調印  
4月 校区市民館竣工  
5月 市教委より小中連携研究委嘱

を受く  
鉄筋校舎起工式（第4期）  
12月 鉄筋第4期工事竣工（職員室、  
校長室、放送室、理科室、図工  
室、玄関）  
木造校舎すべて撤去



完成した校舎

昭和57年2月 同窓会名簿発刊  
11月 小中連携研究発表会  
昭和58年2月 戸田文庫開き（日本電装社長  
戸田憲吾氏 児童図書寄贈）  
9月 優勝旗寄贈（同窓会）  
昭和59年3月 「小島なし」発刊  
昭和60年2月 「こざわ誌」発刊  
西通用門竣工  
10月 プール便所、更衣室、管理室  
設置工事  
昭和61年2月 「戸田文庫」充実のための児  
童図書寄贈（日本電装社長 戸  
田憲吾氏）  
8月 市制80周年記念行事としてタ  
イムカプセルを埋設  
国旗掲揚塔竣工  
児童図書充実のための特別寄附  
（金子昌代氏から10万円）  
昭和62年4月 市教委より「豊かな心を育て  
る推進事業」の移植を受ける。  
（2ヵ年）  
8月 運動場改修工事竣工  
昭和63年1月 学級新聞コンクール（6年）  
で豊橋市長賞を受賞  
10月 下水道工事竣工

平成元年2月 玄関建設工事竣工  
5月 駐車場ブロック塀設置  
10月 「まごころの石」設置  
平成2年7月 裏庭造園  
平成3年3月 プールフェンス取替え  
4月 校名呼称の変更「こざわ」か  
ら「おざわ」へ  
7月 夜間照明設備設置  
平成4年2月 総合配膳室新築  
11月 仲よし広場フェンス取り付け  
平成5年1月 三世代交流会  
10月 PTA5ブロック研修大会  
平成6年6月 渇水のためプール使用全面中  
止  
10月 国体豊橋会場開会式児童参加  
（集団演技）  
平成7年1月 木製遊具（木の広場）新設  
11月 作業室新設  
平成8年4月 市教委より「豊かな心の育成」  
研究指定  
平成10年2月 愛知県学校安全優良学校受賞  
7月 スクールアート  
9月 なしの皮むき大会  
平成11年11月 市民の日行事参加（1日警察  
署長・ちびっこ警察官）  
平成11年度 同窓会よりマーチングバンド  
ユニフォーム46人分寄贈  
平成12年3月 飼育小屋新築  
平成12年度 PTAよりトランペット5台、  
マーチングバンドユニフォーム  
2人分寄贈  
平成12年4月 浜っ子班オリエンテーリング  
遠足（小島海岸）  
平成13年9月 コンピューター室改修  
10月 防犯の集いに警察音楽隊が来  
校  
10月 校舎外壁全面防水措置・塗装  
吹付け

- 11月 芸術鑑賞会開催
- 平成13年度 PTAより広報用アンプ、スピーカー、コンピューター室入り口マット寄贈
- 平成14年 4月 学校5日制開始  
学校評議員制度発足  
市教委より「小中連携推進」研究指定
- 5月 小沢校区大運動会（小学校の運動会と校区の体育大会を合同開催）
- 8月 初めての漢字検定を実施
- 11月 海岸清掃を3校で実施（小沢小、細谷小、五並中）  
五並中での合唱コンクールに5、6年生が参加
- 平成14年度 同窓会より体育館演台一式寄贈
- 平成15年 6月 強化ガラス張替工事
- 10月 構内LAN工事
- 11月 3校合同授業研究会を細谷小で実施  
ウミガメ子ども会議出席（ホテル日航豊橋）
- 平成16年 7月 豊川用水地下水路見学会
- 9月 リトアニア共和国交流
- 10月 3校連携推進研究会発表  
西門扉設置工事
- 平成16年度 PTAより体育館映写スクリーン取付工事一式、舞台看板作成1本寄贈
- 平成17年 4月 タンポポ学級開設
- 5月 愛知万博見学会全児童参加
- 10月 図書システム用端末導入
- 平成18年 1月 「校区みまもり隊」発足（寿会）

# 第5章 宗 教

## 1 神社

### (1) 進雄神社 (小松原町)



祭神 すきのおのみこと 素盞鳴尊  
くまのおおかみ 熊野大神 天昭皇  
 太神 伊久左男神  
いぞうのおおかみ 伊雄太神

伝説によると、当神社は垂仁天皇のころ、南海岸に居村を構えていたとき、東山の南東から「さわらび」という所に鎮座されたのが初めてであるとされている。

聖武天皇の御代に、小松原の東山に御遷宮をされて東観音寺の鎮守となり、近在10か村の社頭であった。

東山天皇の御代の宝永5年に、再び御遷宮をおこなった。東の御遷宮を神明宮とし、その中に熊野大神が祀ってある。御尊体は沈香水に石器時代の匏形の彫刻で、高さが1尺4寸あり、その体裁は東観音寺にある「馬頭観音」によく似ていると伝えられている。

西の御宮の天王宮は、素盞鳴尊が祀ってある。

明治7年の太政官布告により、社号を「進雄神社」と称するようになった。それ以来、毎年行われる祭祀は10月14日と定めた。東観音寺が所有する記録の中には、祭祀の明記されたものが残っている。

### (2) 小島神社 (小島町)

祭神 八柱神社



いきしまひめのみこと  
市杵嶋比売命

あめのおしほみのみこと 天之忍穂耳命  
あめのほひのみこと 天之菩卑命  
あまつひこねのみこと 天津日子根命  
いけつひこねのみこと 活津日子根命  
くまのくすびのみこと 熊野久須毘命  
たぎりひめのみこと 多紀理比売命  
たぎつひめのみこと 多紀津比売命

大正4年の御即位にあたり、後世にこれを記念して残すため、東小島の八柱神社と西小島の八幡宮を合祀して、村の中央部の北方に社殿を建立した。このとき、社号を「小島神社」と改め、大正5年に御遷宮した。

明治の初め、土地を県に返し、山の北西部が村のものとなった。

その後、昭和41年、豊川用水の開通にあたり神社周辺の樹木が伐採され、宮橋をかけたので周りが開けて明るい感じとなった。

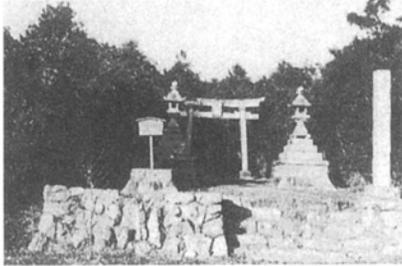
なお、西小島八幡宮は、元来、西小島の海岸にあったが、宝永年間の地震のため北方に移されたものである。しかし、その年代は不詳である。

伝説 ○東小島の中に「若宮」と呼ぶ所があったが、これは「若宮八幡宮」の旧社であるという。また、海浜の近くに「鳥のそば」と呼ぶ所もあるが、この辺りにも宮社があり、「鳥井そば」がなまって伝えられたものだという。

○「鳥のそば」の北裏に、「宮の谷」と称する「字」があったが、これは

神明宮が祀ってあった所だと伝えられている。

(3) 白山神社 (寺沢町)



祭神 熊野大神 菊理比売命  
 保食大神 伊雑皇太神  
 別説によると 伊邪那岐神 伊邪那美神 菊理比売神となっている。

当神社は、昔から遠近を問わず崇敬が厚く、特に太平洋岸の浜街道を往来するとき、当時の通行人が道中の安全を祈る一般の祈願所であった。領主であった大岡越前も、ときどき参拝して人々の幸せを祈願したという。

大正15年、社殿が造営された。

従来、社格は村社であったが、社号の起因など一切不詳である。

(4) 葦ヶ原神明宮 (豊栄町)



祭神 天照大神  
 創祀 昭和23年10月

由緒 本宮は、昭和20年秋、食糧増産国家施策により、二川開拓地(現 豊栄町と富士見町)へ入植し苦難の開拓事業に従事する人たちが、精神的統合と心の支えとして建立した。

昭和55年10月、社殿を改築し宗教法人を設立、神社本庁に所属する神社となった。

2 寺院

(1) 東観音寺 (小松原町)



多宝塔

東観音寺は臨済宗の妙心寺派に属し、1,200年余の歴史をもつ古寺である。

当寺の本尊である「馬頭観音」は、牛馬等の守護仏として広く庶民の信仰のまもであった。今でも畜類の息災を祈る風習

は強く、旧暦2月の二の午の祭りの行事が盛大に行われている。

当寺は、天正5年正月18日(733)行基が開いたと言われる。

以後、寺はしだいに勢力を増していき、鎌倉時代には東三河の地頭の保護を受け、この地方で最強の寺勢をふるうようになった。戦国時代には、この地方の多くの武将からも保護を受けた。とりわけ、戸田宗光や、今川義元は手厚い保護を与えた。

江戸時代に入ると、慶長7年(1602)、家康は小松原一村一円の寺領102石を寄進した。また後年には、漁船5隻を加えるなどの保護を与え、元和2年(1616)には徳川家の祈願所とした。

また、江戸中期に成立した三河三十三か所観音巡礼では、当寺は第一の礼所とされた。明治初期には、廃仏毀釈の影響をうけて苦難の一時期もあったが、すぐに復興して寺勢をもち返した。

戦時中は陸軍大隊本部が置かれたりしたが、幸いにも戦火を免れ現在に至っている。

当寺は以前、海岸近くにあったが、宝永4年（1707）の天津波のため、寺は部落もろとも壊滅し、ようやく正徳5年（1715）になって再建、現在地に移転された。

山門に立つと、その正面に本堂があり、その前面に多宝塔、本堂の左に接続して方丈、その左に庫裏、奥に書院がある。

重要文化財である多宝塔は、大永8年（1528）戸田氏の重臣であった藤田左京享により寄進された。現在のものは、宝永の被災後に移築して修理されたもので、三間こけらぶきの塔婆である。寺には、大永8年と刻まれた版木が残っている。

この塔の特徴は、多宝塔では数少ない唐様をみせていることである。唐様というのは、中国の宋朝から伝わった禅宗の建物を指し、禅宗様ともいわれる。扇垂木や、<sup>おおきだるき</sup>棧唐戸にもこれをみることができ、<sup>しゅみだん</sup>安置されている須弥壇も禅宗様である。

金銅馬頭観音御正体は、文永8年（1271）に、安達泰盛が寄進したもので円板に馬頭観音坐像を半肉で浮き出させたものである。

紀年、寄進者、工匠名を刻した懸仏としては、わが国最古のものとされている。

阿弥陀如来坐像は、鎌倉時代の秀作といわれ、桧材の寄木造りの像で、重要文化財に指定されている。いまだに金箔がよく残っている。また、銅たくの鈕部が残されているが、白須賀で発見されたと言われている。

次に、二天像であるが、これは多聞天と持国天のことである。顔だけを除いて本体も邪鬼もナタ彫りであることに特徴があり、市の文化財に指定されている。

収蔵庫以外にも・絵巻・書画・器物・古文書など数多くの文化財がある。たとえば、牧溪・周沢・雪舟・探幽・安信・大雅堂・芦雪・孝敬などがそれである。

以上に述べてきた文化財は毎年8月下旬に

寺宝展（宝物の虫干し）があり、貴重な財宝が一般に公開されている。なお、観音堂の前庭、多宝塔の前に芭蕉の句碑がある。「道のべの、むくげは馬に喰われけり」と詠まれているが、これはこの地で詠まれたものではない。

## （2）正法院（小松原町）

この寺は東観音寺の塔頭として、惣門の右側に位置する寺である。同寺の仲山和尚の隠寮である大安軒を改めて、正法院と称した。同じく塔頭の高福院（現在は廃寺）の黙隠文守和尚を開山としたもので、その創立や改称は、いずれも年次が不明であり、後世の昭和17年になって旧称の正法庵を現在のように改めた。

当寺の本尊である薬師如来の座像については、不詳である。

本堂は、昭和19年12月の三河地震のときに倒壊したが、戦後の昭和23年に新築した。倒壊前の本堂の脇壇には十王尊が安置されていた。

この尊像は、上細谷の廃寺である宝聚庵（一説には同地の海月院）から大正初期になって当寺に移されたものである。

しかし、前述のように三河地震で倒壊したときに破砕されてしまい今はそれを見ることができない。

なお、当寺の庫裡は宝聚庵にあったものを移築したものである。

戦時中に、仏具や什器の一切を供出したが、戦火と農地法適用の厄だけはまぬがれること



ができた。

宗派は臨済宗の妙心寺派に属している。

### (3) 東漸寺 (寺沢町) 臨済宗

もと、東観音寺の末寺であった。

当寺の創立は応安5年(1372)の4月である。

行基菩薩を勧請開山と仰ぎ、初めは東福寺と称していたが、火災により焼失した。その後、慶長12年(1607)に東漸庵と改称し、昭和17年、現在のように改めた。

創立当初の所在地は、南の方の海辺であったが、宝永4年(1707)の大津波の後、現在地に移された。

享保13年(1728)の当時書上には、次のような記録が残っている。(東観音寺所蔵)

- ・客殿(4間半)×(5間半)
- ・庫裡(3間半)×(5間半)
- ・山林(23間)×(39間)
- ・檀家36戸
- ・田畑の合計3反2畝29歩で13か所にあった。当寺の本尊は、観世音立像であるが、伝春日作についてはわからない。脇壇には伝太子両脇士像が安置されている。

当寺の伽藍の変遷については明らかではない。明治6年に本堂の瓦ふきかえを行った。

明治維新のとき、海辺の各地に神道改宗をする人が多かったが、当寺の関係



者には改宗が比較的少なく、改宗をした人でも、その後の社会の安定とともに、ほとんどが復帰した。

戦時中には、仏具や什器の一切を供出した。昭和19年以降に、兵員50～60名ほどが滞在したが、終戦により引き揚げた。

なお、当寺は大正5年に法地に昇格(和尙

寺になったこと・それまでは平僧地とって、小僧資格の寺であった。)した。

### (4) 大応寺 (小島町)

当寺の創立は文禄4年(1595)、開山は東観音寺の和尚である。

明暦2年(1655)と文化5年(1715)、当時の過去帳によると、初め当寺は現在地の南東の海辺にあったが、宝永4年の大津波(1707)により衰退した。

その後、寛永の時代(1624～1643)の現在地に移転した。寛永6年(1629)に庫裡1棟を新築した。正徳5年(1715)に客殿を修理、文化5年(1715)には伽藍の再建をした。

明治維新のとき、普門庵を吸収合併して同寺の本尊や過去帳、墓碑などのすべてを当寺に移した。

当寺の本尊である聖観音座像については、詳細は不明である。

現在の伽藍は文化5年(1715)の建物で、同12年に瓦ぶきとなり、旧幕時代の当寺は境内も広大であった。明治維新の混乱のとき縮小された。同時に排仏の風潮に乗じて当村の120戸のうちの17戸以外は全部が神道に改宗した。しかし、その後になり社会が安定してくると少しずつ復帰して、現在は約半数が当寺の信徒である。

明治初年、当寺は大応義塾を開いて村民の教育にあたり、大正5年には法地に昇格した。戦時中には仏具や什器を供出し、兵員たち50



余名が滞在した。幸いにも戦火はまぬがれたが、農地法の適用をうけて耕地の2

町1反を失った。当時の境内には、「貞亨元年奉巡礼三十三観音」と刻した石像観音立像

がある。

### (5) 晋門院 (小島町) 廃寺

いつごろの創建か確かな記録はないが、元亀3年(1572)の開山で、東観音寺の末寺であるらしい。東観音寺が所蔵している享保13年(1728)の古文書の中には、方丈が6間と4間で庫裡が4間半と2間半で、門はなかったと記されている。また、明治3年の届書を見ると、境内が3畝30歩で年貢地は1,330坪あり、檀家は30戸で、その頃には住職もいた。しかし、明治維新になって信教の自由が認められ、神道に改宗したのもあって、だんだんと衰退していった。

その後、大応寺に吸収合併となり、本尊や過去帳などの一切を大応寺に納めた。しかし、晋門院の庫裡だけはしばらくは存置して、「小島小学校」の一部に充用された。また、明治13年には本堂の跡地に校舎を新築した。

かつては住職もいた寺であるが、今では訪れる人もほとんどいない。

## 3 風俗信仰

### (1) 庚申信仰

庚申堂 道教の呪術的信仰に基づくと言われる庚申信仰は、わが国においては平安初期以来行われ、菅原道真の菅原文草、宇津保物語、順集、源為憲の口遊、多数の歌合、枕草子以下の諸文献に散見される。殊に和漢朗詠集には庚申の一項は独立しており、平安時代の遺族階層における盛行を物語っている。江戸時代に入ってから民間習俗として庚申侍が全国に普及している。

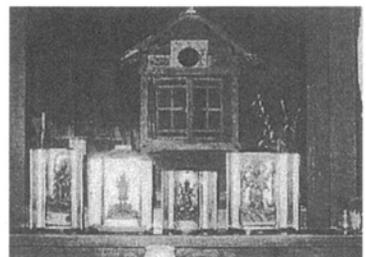
明治の排仏毀釈令により異端視された庚申像は人目につかない社寺境内の奥に移されたり、また名を「猿田彦之命」と改名をし祀りを続けた。

小沢校区には、小島町の太平洋を見下ろす風光明眉の高台に、庚申堂と呼ぶ小さなお堂がある。これは昭和17年に改築されたものである。堂内は二つに分かれ、右方の碑石には「庚申」と刻まれており、左方には小さな祠があって、その中に金比羅様が安置されている。また、寺沢町の東漸寺本堂前や小松原町の庚申山にも古くから庚申堂がある。

地引網が盛んであった頃、豊漁の時は漁師の若い衆が海中に身を清め、素足、素裸で魚を入れた「かかみ」を担いで、ヨイショ、ヨイショと威勢のよいかげ声で走り、この金比羅様に供え、お礼参りをしたと言われている。これを「裸参」と呼んでいた。

お庚申様 お庚申様とは、実の祭神は梵天釈帝青面金剛童子と言い庚申(かのえさる)の日を行事の日と定め、庚申仲間が集まって祝いごとや祀りをした。申が御神のお使いということから、お庚申様と呼ぶようになったと言われている。五穀豊じょうの百姓の神として、農家では深く信仰してきた。御神体が四体、小島町の大応寺や寺沢町の東漸寺に安置されている。

徹夜の習俗と伝承 庚申侍は平年6回、閏年7回、巡ってくる庚申の日に行うものとされ、日



庚申像(大応寺)

没後より夜半にまでおよぶとされていた。

第二次大戦後の食糧事情を契機として、回数も減り、年4回行われるようになり、現在では、庚申仲間がまわり番でその当番の家に集まる。行事の当日に列席する人は魚介類を食することは禁じられており、また、家族に忌のある人もこの席には臨むことができないとされている。

庚申のおまつりとしては、棚に庚申像をまつり、勤行のあと、食事や雑談をして帰る。したがって、縁起書に記されている「徹夜して祭祀する」ということはなくなり、夜も10時を廻るころには各自帰宅するようになった。

「話は庚申の晩」とか「庚申の夜の男女同衾の禁止」などの言い伝えもあった。こうした庚申伝承は明治、大正、さらに昭和初年に出生した講中までで、昭和も二桁生まれの人たちにはあまり信じられていない。

## (2) 熱田講

明治初年の排仏毀釈令により仏教より神道に転向した人たちは、その際に庚申祀りを廃止し、代わりに熱田神宮より分霊を仰ぎ、天照皇太神を拝する熱田講（本来は伊勢講）という純然たる神道講を組織した。庚申講にならない10月、12月、2月、4月（第二次大戦までは平年6回、閏年7回）講中が寄り集まり、祭祀をいとなんでいる。

小島町では、熱田神宮を崇敬していた朝倉の先祖が2～3人知多郡から移住し、熱田講をはじめたと言われる。その後、明治に入ってから仏教から神道へと転向した人たちにより信者が増えた。

また、小松原町では、天目堂、東堂、大堂（いずれも神仏混合）の三つの堂に分かれて熱田講が行われている。

当番は順番になっていて、当番の家では前日に組内を廻って米を集め、当日は男の人は風呂で体を清め、女の人は料理を作ることになっている。

熱田講の祭祀は、掛軸をかざり、祭壇の供物として、神酒、洗米、餅、さかな、のり、こんぶ、かんてん、野菜、くだもの等を供え、祝詞を奏上し、皆が拝礼して直会なむらいをしながら歓談する。

昔は日没後より夜半まで行われていたが、

今では夜7時ごろからはじまり、10時ごろには各自帰宅している。

## (3) 秋葉信仰

秋葉山本宮秋葉神社（静岡県周知郡春野町領家秋葉山）への信仰である。

火之迦具土大神ひのかぐつちのおおかみを祀り、鎮火、防火の神としての信仰が篤く、近郊はもとより各地の分社と講社をもつ。

創立の年代は詳らかではないが、社伝によれば和銅年中（708～15）の鎮座という。

国民の間に秋葉講も江戸期には相当の高まりをみせたと言われる。

元明天皇の御製に

“あなたふと秋葉の山にまし坐せる

この日の本の火防ぎの神”と

詠まれている。

昔は小沢から秋葉山へ行くのに山づたいに行っていたと言われているが、現在は順番に秋葉山まで行って町内のお札を受けてくる習慣になっている。毎年12月15日の神社大祭に代参者が出向き、翌日、各町の神社で祈禱をし、餅投げをしたあと、各組長を通してお札が各家庭に配られる。夜はお日待が行われるところもある。おそらくお札をもらってきてくれた人へのお礼の意味であろう。費用は秋葉神社参拝費の名目で町費として各家庭で負担している。

## 第6章 名所・旧蹟・人物

### 1 名所・旧蹟

#### (1) 衣山先師碑

東観音寺の住職（現住職の先々代）であった和尚は、徳川末期から明治中期にかけて才徳のある和尚として広く知られ、特に漢学に優れていた。明治24年没。教え子たちが協議を重ね、和尚への深いおもいと、永くその霊をなぐさめるために、境内の一隅にこの碑を建設した。享年65才。

#### (2) 東観音寺御衣木

今から1,200年ほど前に、開山行基菩薩が海岸に流れついた霊木で、本尊「馬頭観音像」を刻まれた。その残り木を堂前に祀った。

この霊木は、不思議なことに一滴の露もうけずに朽損することもないと伝えられている。

#### (3) 従軍馬匹忠魂碑

日清（1894）、日露（1904）の両戦役において、従軍中にたおれた馬匹の供養のため、村の有志の者が語り合い、その人々の力ぞえで建てられた碑である。

牛馬の守護仏として有名な馬頭観音は東観音寺の境内に建立された。発起人の主体は、牛馬商連盟の花口段戸組となっている。

#### (4) 忠魂碑

昭和9年、小沢校区民が主体となり、日清・日露の戦役において校区内の戦没者の慰霊のために、小沢小学校の校庭に建立したものである。工事費は当時で、882円、村1戸

割当が3円50銭の拠出金によって賄われた。

戦後は、連合軍最高司令官マッカーサー元帥の命令により、校内から撤去をして現在の東観音寺の境内に移転したものである。右側には祖霊社が建ち、毎年4月7日には祖霊社大祭を盛大に取り行っている。

#### (5) 小島神社と豊川用水のみやはし

昭和43年5月、豊川用水の通水で、小島神社へ行く参道が幹線用水路で分断されたために架けられたのがこの橋である。長い用水路の中でこの橋だけが神社参拝用に架けられたものである。

#### (6) 戸田五郎左衛門の墓

小島町大応寺の墓地に一歩足を踏み入ると、一際目立って大きな墓が目に入る。墓の表には「戸田五郎左衛門君之墓」、裏には「明治29年3月、尾三遠有志中」と刻まれている。

今から90年前、渥美半島片浜13里を巻き込む、打瀬網騒擾事件が起きた。当時、小沢村の網元として信望の厚かった五郎左衛門も、この事件で兇徒しょう集罪に問われ、服役中、流行感冒にかかり獄死してしまった。村人は五郎左衛門の死を悲しみ、霊を慰めるために墓を建てた。事件の結末は不幸であったが、村のために尽した人として忘れがたい。

#### (7) 東漸寺の行者塔

寺沢町の東漸寺本堂から、墓地におりる坂道の入り口に、苔むした行者塔が1基ある。

うす日のもれる榎の木かげに、六地藏とともに並ぶこの塔には資料こそ定かではないが、昔からこんな物語が伝わっている。

今から380年ほど前、慶長年間にまでさかのぼる。北陸地方の某藩の武士が1人、父の仇をさがし求めて全国を歩き回るうちに、いつしか路銀も使い果たしてしまい、流浪の果てに寺沢の東漸寺の仏門をたたいた。当時の住職である安嶺禪師は、そうした彼を温かく迎えてやり、1年ほど寺の使用人として働かせながら身心の疲れをいやしてやった。翌春、父の仇が四国の丸亀藩にいるとのうわさを風の便りに聞き、再び仇を求めて西国33か所の巡拝の旅に出た。まだ見ぬ仇を求めて数年、その間に南国の美しい自然にふれ、神社仏閣を巡るうちに彼の心はいつしか仇を討とうとする憎しみから、罪人を許そうとする慈悲の心が芽生えていった。

ある日、ほん然として悟った彼は、長い復しゅうの夢から覚め、仇討ちをやめて懐しい故郷へと思ってはみたものの、今さら仇を討たずに帰藩もできず、思いあまった末に仏縁を得た三河の東漸寺に杖を運び、頭をまるめて仏門に入り安嶺禪師の弟子となった。

本堂西の行者塔は、彼が後年この寺の住職になったときに西国33か所の苦しい思い出に加え、彼と同じ諸々の恨み悩みをもつ悲しい遍路たちの幸せを願い、海岸の墓地に建てたものだという。

宝永4年(1707)の天津波のときも、この塔だけは不思議にも残って現在に至っている。

### (8) 軍の陣地の跡

小島町の海岸近くの草むらの中、眼下には遠州灘や晴れた日には西に紀伊半島が望める一角に、軍の陣地がある。

太平洋戦争も終わりに近い、昭和19年から20年の夏にかけて、小島町も敵の上陸に備え

て、陣地の構築をしていた。小島町字東浜の、通称「高羽根」とよばれる所にも強固な陣地構築が行われた。

当時は、この地方に「<sup>いかり</sup>怒部隊」という歩兵連隊が駐屯して渥美半島を防備していた。海岸線の山林の中には無数の陣地があったが、特にこの陣地は鉄筋コンクリート造りで、要塞砲が備えられていたと言われている。

兵器や食糧、その他の物資が不足のとき、大砲も日露戦争当時のものが置かれていたそうである。村人たちも、今は近寄ることもほとんどなく、銃眼だけが空しく太平洋をにらんでいる。

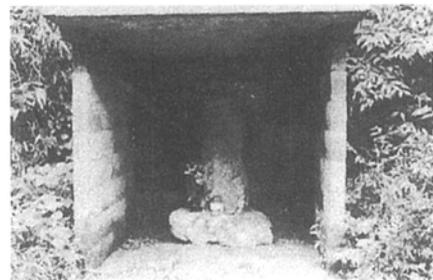
### (9) 東観音寺跡地

小松原の海岸へ下りる途中、畑の一角に雑木林が残されている。中に踏み入ると「開山行基菩薩」と刻まれた石碑が建っている。

ここは以前、東観音寺があったところである。

宝永4年(1707)渥美半島一帯に被害をもたらした大地震により、部落が移動した。これを機に東観音寺も宝永5年(1708)から享保元年(1716)にかけて現在地に移転した。

眼下に洋々たる遠州灘をながめっていると、1,200年の昔、行基菩薩が浜に流れついた霊木で馬頭観音の像を刻み、一字の堂を建てたのもうなずける。



跡地に建てられた石碑

## 2 人物

### (1) 大林宇吉

万延元年～昭和8年（1860～1933）

渥美郡寺沢村の生まれ。朝倉仁右衛門らが設立した細谷製糸工場で原料係として勤務していたが、小淵志ちの開発した玉糸解舒法に着目、明治21年志ちの教えを受けていた工女六人を雇い入れて玉糸座繰工場を開いた。さらに長野県などを巡察して研究を重ね、28年には蒸気機関を応用した玉糸の機械製糸に成功した。また、日清戦争後の不況から危機を迎えた製糸業界の苦境をしのぐ手段として明治34年、東三河を中心に遠州地方の同業者も糾合して三遠玉糸同業組合を設立し組合長に就任した。

### (2) 朝倉清右衛門

天保9年～明治32年（1838～1899）

渥美郡小島村の生まれ。幼少の頃から文学好きで、進取の気性に富んでいた。殊に教育に熱心で、壮年になり学校世話方となって活躍した。この時代には、どの村落においても特別な校舎はなく、寺院等を代用して無学な村民を教えた。明治13年、普門庵あとに当時としては、堂々とした校舎を新築し、渥美郡中随一の校舎と言われた。世話方在職中は、毎日出勤して教育向上のために私利を顧みず努力をした。また先見の明もあり、現在の補習教育ともいべきものを東観音寺内に設け、小学校卒業者を教育した。次男幾太郎にもっぱら指導を任せ、後に、五並村村戸長を拝命し、村政に尽した。60才を一期として明治32年6月に死去した。

教育向上、及び、村政改善のため惜しまれたが、氏が在世中の貢献はいまなお輝いている。

## 五並中学校連凧記録集



### 第1回 (昭和60年)



- ☆実施日 昭和60年11月2日
  - ☆達成記録 1,713枚 (中学校新記録)
  - ☆星形 (直径33cm) エストレリータ (33.18×2 16×2)
  - ☆連凧委員長 伊藤 博
  - ☆生徒会長 伊藤 宏師
  - ☆口 - プ 直径5ミリのナイロン芯入り
  - ☆目標枚数 6,000枚
  - ☆準備枚数 8,500枚
  - ☆校長 宮野 欣也
  - ☆テーマ 「小さな学校の大きな夢」
  - ☆場所 細谷海岸
- △TBRよりロープを購入、日東電工よりテープをいただく、シートは飼料袋を使用

### 第2回 (昭和61年)



- ☆実施日 昭和61年10月13日
  - ☆達成記録 0枚
  - ☆星形 (直径33cm) エストレリータ (33.18×2 16×2)
  - ☆連凧委員長 鈴木 昭彦
  - ☆生徒会長 山本 みか
  - ☆口 - プ 直径5ミリのナイロン芯入り
  - ☆目標枚数 6,000枚
  - ☆準備枚数 9,000枚
  - ☆校長 宮野 欣也
  - ☆テーマ 「小さな学校の大きな夢」
  - ☆場所 細谷海岸
- ※5回ロープが切れる。3,500枚は海中へ  
 △この年よりTBRよりロープをいただく  
 △この年より市内の小中学校へ芋の販売を始め、竹ひごを購入

第3回（昭和62年）



- ☆実施日 昭和62年10月10日
  - ☆達成記録 0枚
  - ☆星形（直径22cm）エストレリータの小型
  - ☆連風委員長 朝倉克幸
  - ☆生徒会長 森武二
  - ☆口 - プ 直径10ミリのケブラー テーパー式
  - ☆目標枚数 7,151枚
  - ☆準備枚数 15,000枚
  - ☆校長 林義治
  - ☆テーマ 「小さな学校の大きな夢」
  - ☆場所 小島海岸
- ※2,500枚は海中へ。再度挑戦すれど風吹かず断念  
△この年ロープの繋ぎ方テスト実施、ダブルのもやい結びが強いことが判明

第4回（昭和63年）



- ☆実施日 昭和63年11月3日
  - ☆達成記録 5,740枚
  - ☆ダイヤ型 24cm×27cm
  - ☆連風委員長 村田典昭
  - ☆生徒会長 青木伸悟
  - ☆口 - プ 直径10ミリのケブラー テーパー繋ぎ
  - ☆目標枚数 7,151枚
  - ☆準備枚数 15,000枚
  - ☆校長 林義治
  - ☆テーマ 「小さな学校の大きな夢」
  - ☆場所 小島海岸
- ※ロープが切れて海中に墜落  
△この年よりTBR、日東電工へPTA・健全育成会がお礼に行く

第5回（平成元年）



- ☆実施日 平成2年3月6日
  - ☆達成記録 4,859枚
  - ☆ダイヤ型 23cm×24cm
  - ☆連風委員長 藤田英樹
  - ☆生徒会長 彦坂猛
  - ☆口 - プ 直径10ミリのケブラー テーパー式
  - ☆目標枚数 7,151枚
  - ☆準備枚数 13,900枚
  - ☆校長 林義治
  - ☆テーマ 「栄光をつかめ」
  - ☆場所 小島海岸
- ※ロープが5回切れて海中へ墜落

第6回（平成2年）



- ☆実施日 平成2年11月3日
- ☆達成記録 6,200枚
- ☆ダイヤ型 18cm×24cm
- ☆連風委員長 朝倉洋平
- ☆生徒会長 杉浦恵美
- ☆口 - プ ダイニーマ 結束部分多数
- ☆目標枚数 7,151枚
- ☆準備枚数 12,000枚
- ☆校長 杉江圭一
- ☆テーマ 「チャレンジしよう」
- ☆場所 小島海岸

## 第7回 (平成3年)



- ☆実施日 平成3年11月4日
  - ☆達成記録 11,100枚
  - ☆ダイヤ型 25cm×17.3cm
  - ☆連凧委員長 六峰宏幸
  - ☆生徒会長 八木紀幸
  - ☆口 - プ 直径1ミリ~8ミリのテーパー式
  - ☆連凧コンクール開始
  - ☆最優秀凧 池崎美穂
  - ☆目標枚数 11,284枚
  - ☆準備枚数 13,900枚
  - ☆校長 杉江圭一
  - ☆テーマ 「進め!勝利への道へ」
  - ☆場所 小島海岸
- ※途中より横風に変わり、凧の尾がロープに巻き付き世界記録に184枚不足  
△この年よりロープが3本となる (5 km)

## 第8回 (平成4年)



- ☆実施日 平成4年11月22日
  - ☆達成記録 9,609枚
  - ☆ダイヤ型 20cm×14cm
  - ☆連凧委員長 長谷川 淳一
  - ☆生徒会長 井上登子
  - ☆口 - プ ダイナーマのテーパー仕上げ
  - ☆目標枚数 11,285枚
  - ☆準備枚数 16,000枚
  - ☆校長 杉江圭一
  - ☆テーマ 「まけてたまるか」
  - ☆場所 小島海岸
- ※3,700枚まで揚がったが、風がなくなり勇気ある撤退

## 第9回 (平成5年)



- ☆実施日 平成5年11月10日
  - ☆達成記録 7,908枚
  - ☆ダイヤ型 25cm×17.3cm
  - ☆連凧委員長 鈴木教泰
  - ☆生徒会長 鈴木智子
  - ☆口 - プ ダイナーマのテーパー式
  - ☆凧の付け方 グー・チョコキ・パーセット  
GTPの繰り返し間隔セット
  - ☆目標枚数 11,285枚
  - ☆準備枚数 16,000枚
  - ☆校長 白井良和
  - ☆テーマ 「完全燃焼」
  - ☆場所 小島海岸
- ※準備した14,826枚の凧を全て揚げたが、回収したら先端が切れていた  
△この年よりアイセロ化学よりシートをいただく

## 第10回 (平成6年)



- ☆実施日 平成6年11月19日
  - ☆達成記録 2,049枚
  - ☆ダイヤ型 25cm×17.3cm
  - ☆連凧委員長 山本純也
  - ☆生徒会長 金子浩之
  - ☆口 - プ ダイナーマのテーパー仕上げ
  - ☆凧の付け方 1/2 グー・チョコキ・パーセット  
GTPの繰り返し間隔セット
  - ☆目標枚数 11,285枚
  - ☆準備枚数 20,058枚
  - ☆校長 白井良和
  - ☆テーマ 「挑戦は成長へ、努力は成功へ」
  - ☆場所 小島海岸
- ※11,597枚揚げたが、回収中に失速し海中に落ちた

**第11回 (平成7年)**



☆実施日 平成7年11月15日  
 ☆達成記録 5,000枚  
 ☆ダイヤ型 25cm×17.3cm  
 ☆連風委員長 村田修一  
 ☆生徒会長 村田彩  
 ☆口 - ブ ダイナーマのテーバー式  
 ☆風の付け方 グー・チョコキ・パーセット  
 GTPの繰り返し間隔セット  
 ☆目標枚数 11,285枚  
 ☆準備枚数 16,000枚  
 ☆校長 白井良和  
 ☆テ - マ 「目標はいつも頂点を」  
 ☆場所 小島海岸  
 ※午前、午後と挑戦するが、横風が強すぎて断念  
 △この年より海中の微生物により溶けるシートに変更

**第12回 (平成8年)**



☆実施日 平成8年11月14日  
 ☆達成記録 5,500枚  
 ☆ダイヤ型 25cm×17.3cm  
 ☆連風委員長 村田奈巳  
 ☆生徒会長 川田尚賢  
 ☆口 - ブ ダイナーマのテーバー仕上げ  
 ☆風の付け方 松竹梅セット  
 松竹梅の繰り返し間隔セット  
 ☆目標枚数 11,285枚  
 ☆準備枚数 17,600枚  
 ☆校長 鈴木佳和  
 ☆テ - マ 「夢見るものは一つの成功、願うものは一つの感動」  
 ☆場所 小島海岸  
 ※約5,000枚が揚がったが、繋ぎ目が離れ落下

**第13回 (平成9年)**



☆実施日 平成9年11月17日  
 ☆達成記録 12,677枚 ギネスブックの世界記録樹立  
 ☆ダイヤ型 25cm×17.3cm  
 ☆連風委員長 陶山知克  
 ☆生徒会長 金子博  
 ☆口 - ブ ダイナーマのテーバー式  
 ☆風の付け方 HLMセット  
 HLMの繰り返し間隔セット  
 ☆目標枚数 11,285枚  
 ☆準備枚数 17,000枚  
 ☆校長 鈴木佳和  
 ☆テ - マ 「一つの嵐に心を込めて」  
 ☆場所 小島海岸

**第14回 (平成10年)**



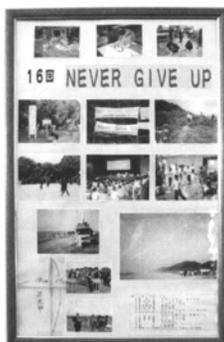
☆実施日 平成10年11月14日  
 ☆達成記録 15,585枚 ギネスブック世界記録更新  
 ☆ダイヤ型 20cm×19.5cm  
 ☆連風委員長 金子麻美  
 ☆生徒会長 初澤久美子  
 ☆口 - ブ ダイナーマのテーバー仕上げ  
 ☆風の付け方 いろはセット  
 いろはの繰り返し間隔セット  
 ☆目標枚数 12,677枚  
 ☆準備枚数 17,017枚  
 ☆校長 鈴木佳和  
 ☆テ - マ 「世界連覇 世界一という実感をもう一度」  
 ☆場所 小島海岸

## 第15回 (平成11年)



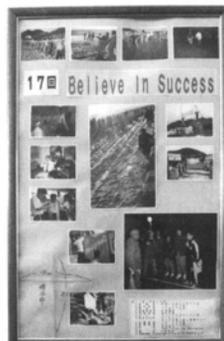
☆実施日 平成11年11月13日  
 ☆達成記録 0枚  
 ☆ダイヤ型 17cm×18cm  
 ☆連凧委員長 吉川昌克  
 ☆生徒会長 石田麻里子  
 ☆口 - プ ダイナーマのテーパー式  
 ☆凧の付け方 TWAセット  
 TWAの繰り返し間隔セット  
 ☆目標枚数 15,586枚  
 ☆準備枚数 20,365枚  
 ☆校長 土井孝介  
 ☆テ - マ 「世界三連覇」  
 ☆場所 小島海岸  
 ※ロープが3回切れ、3回目4,700枚海中へ

## 第16回 (平成12年)



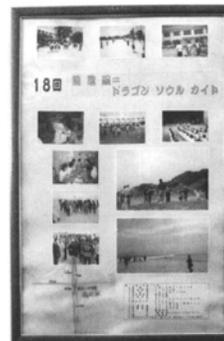
☆実施日 平成12年11月25日  
 ☆達成記録 8,339枚  
 ☆ダイヤ型 19cm×18cm  
 ☆連凧委員長 尾崎仁美  
 ☆生徒会長 白井希知  
 ☆口 - プ ダイナーマのテーパー仕上げ  
 ☆凧の付け方 WMRセット  
 WMRの繰り返し間隔セット  
 ☆目標枚数 15,586枚  
 ☆準備枚数 20,000枚  
 ☆校長 土井孝介  
 ☆テ - マ 「NEVER GIVE UP」  
 ☆場所 小島海岸  
 ※南風になり危険防止のため中止、先端まで全て回収

## 第17回 (平成13年)



☆実施日 平成13年11月12日  
 ☆達成記録 15,304枚  
 ☆ダイヤ型 20cm×18cm  
 ☆連凧委員長 村田唯奈  
 ☆生徒会長 金子正義  
 ☆口 - プ ダイナーマのテーパー式  
 ☆凧の付け方 BISセット  
 BISの繰り返し間隔セット  
 ☆目標枚数 15,586枚  
 ☆準備枚数 20,000枚  
 ☆校長 土井孝介  
 ☆テ - マ 「BELLEVE IN SUCCESS」  
 ☆場所 小島海岸  
 ※格闘6時間、2万の凧が揚がるが282枚不足で記録更新ならず

## 第18回 (平成14年)



☆実施日 平成14年11月16日  
 ☆達成記録 9,834枚  
 ☆ダイヤ型 18.5cm×10cm  
 ☆連凧委員長 尾崎千陽  
 ☆生徒会長 白井亨典  
 ☆口 - プ ダイナーマのテーパー仕上げ  
 ☆凧の付け方 DSKセット  
 DSKの繰り返し間隔セット  
 ☆目標枚数 15,586枚  
 ☆準備枚数 21,580枚  
 ☆校長 稲垣哲哉  
 ☆テ - マ 「龍・魂・凧=ドラゴン・ソウル・カイト」  
 ☆場所 小島海岸  
 ※風の方向よく2万枚全て揚げたが、回収時ロープが切れ海中へ

第19回 (平成15年)



☆実施日 平成15年11月17日  
 ☆達成記録 2,054枚  
 ☆ダイヤ型 19cm×22cm  
 ☆連凧委員長 廣田好美  
 ☆生徒会長 伊藤陽祐  
 ☆ロープ ダイナーマのテーパー仕上げ  
 ☆凧の付け方 挑戦心セット  
 挑戦心の繰り返し間隔セット  
 ☆目標枚数 15,586枚  
 ☆準備枚数 21,540枚  
 ☆校長 稲垣哲哉  
 ☆テーマ 「伝説の1ページ」  
 ☆場所 小島海岸  
 ※2日間延びて揚げたが、2回挑戦するもロープの途中が海中へ

第20回 (平成16年)



☆実施日 平成16年11月13日  
 ☆達成記録 19,789枚 ギネスブックの世界記録更新  
 ☆ダイヤ型 21.5cm×20cm  
 ☆連凧委員長 村松知果  
 ☆生徒会長 白井克佳  
 ☆ロープ ダイナーマのテーパー仕上げ  
 ☆凧の付け方 一凧魂セット  
 一凧魂の繰り返し間隔セット  
 ☆目標枚数 15,586枚  
 ☆準備枚数 22,222枚  
 ☆校長 稲垣哲哉  
 ☆テーマ 「風雲児」  
 ☆場所 小島海岸  
 ※リードの部分が切れ、予備凧で再度挑戦、見事新記録達成

第21回 (平成17年)



☆実施日 平成17年11月12日  
 ☆達成記録 5,715枚  
 ☆ダイヤ型 21cm×18.5cm  
 ☆連凧委員長 伊藤恵  
 ☆生徒会長 今村麻衣  
 ☆ロープ ダイナーマのテーパー仕上げ  
 ☆凧の付け方 風・神セット  
 風・神の繰り返し間隔セット  
 ☆目標枚数 19,789枚  
 ☆準備枚数 23,000枚  
 ☆校長 稲垣哲哉  
 ☆テーマ 「風神」  
 ☆場所 小島海岸  
 ※2度ロープが切れるが挑戦するも海中につかること数回、凧の破損多く断念

## 参考文献・資料等

- |                    |                  |          |                    |
|--------------------|------------------|----------|--------------------|
| 郷土地誌               | 二川町西部尋常高等小<br>学校 | 豊橋の碑     | 山田久次               |
| 郷土史研究録             | 同上               | 豊橋蚕糸の歩み  | 豊橋市教育委員会           |
| 郷土研究（第1集）          | 渥美郡二川町郷土研究<br>会  | 愛知県警察史   | 愛知県警察史編纂委員<br>会    |
| 学校沿革誌              | 小沢小学校            | 東三河の歴史   | 東三高校日本史研究会         |
| 五並連胤記録             | 五並中学校            | 豊橋の町名の変遷 | 吉川利明               |
| 同窓会名簿              | 小沢小学校同窓会         | 豊橋めぐり    | 同上                 |
| 小島なし               | 小沢小学校            | 田原町史     | 田原町                |
| 小沢農業協同組合沿革史        | 小沢農業協同組合         | 赤羽根町史    | 赤羽根町               |
| 五並村村誌              | 五並村              | 豊橋の文化財   | 豊橋市教育委員会           |
| 高豊史                | 高豊史編纂委員会         | 写真集 豊橋   | 鈴木源一郎              |
| 郷土誌 天伯             | 天伯小学校            | ふたがわ     | 二川小学校              |
| 地学めぐり              | 豊橋地学同好会          | 豊川用水     | 愛知用水公団             |
| カラー図鑑百科 植物         | 鈴木 勤             |          | 愛知県・静岡県            |
|                    | 鳥類 同上            | 東三河の庚申信仰 | 鈴木源一郎              |
| 渥美半島植物記            | 恒川敏雄             | ふるさと豊橋   | 豊橋市校区社会教育連<br>絡協議会 |
| 豊橋市史（1・2・3・5・7）    | 豊橋市              | 豊橋寺院誌    | 豊橋仏教会              |
| 渥美郡史               | 渥美郡役所            | 愛知県神社誌   | 熱田神宮               |
| 渥美半島の須恵器窯          | 森田勝三             |          |                    |
| 豊橋市南部における平安朝瓷器古窯址群 | 伊藤 愼             |          |                    |
| 参河名所図絵             | 愛知県教育会           |          |                    |
| 高師風土記              | 高師風土記刊行委員会       |          |                    |
| 東海道二川宿の研究          | 紅林太郎             |          |                    |
| 郷土散策               | 鈴木源一郎            |          |                    |
| 豊橋市政五十年史           | 豊橋市              |          |                    |
| 愛知県開拓史             | 愛知県              |          |                    |
| 豊橋雷動_記             | 近藤鹿堂             |          |                    |
| 愛知県の地名             | 平凡社              |          |                    |
| 工場の概要              | 大林製糸所            |          |                    |
| とよおか誌              | 豊岡中学校            |          |                    |
| 郷土を築いた先覚者たち I・II   | 豊橋市美術博物館         |          |                    |
| 国史上より観たる豊橋地方       | 大口喜六             |          |                    |
| 豊橋の史跡と文化財          | 豊橋市教育委員会         |          |                    |

## 編集後記

小沢校区の歴史に触れ、昔懐かしい子ども時代を思い出し、こみ上げてくるものを感じたのは私だけではないと思います。私たちは、普段どおりに朝陽が昇り夕陽が沈む、ごく当たり前の毎日を過ごしていますが、幾多の苦難を乗り越えて来られた先人のおかげであることを決して忘れてはいけません。そして、次世代を担う若者たちに伝えたいメッセージとして世界に誇れる五並中学校の連凧の記録を末尾に掲載させていただきました。世間では暗い話題ばかりが報道されていますが、一本のロープに「夢」と「情熱」を乗せ大空高く舞い上がる姿を見ればきっと勇気と希望が湧いてくると思います。事ある毎にこの校区史をご覧くださいできれば幸いに存じます。

### 本書の編集に携った者

小沢校区史編集委員会

|      |             |
|------|-------------|
| 委員長  | 戸田政克        |
| 副委員長 | 伊藤勝章        |
| ”    | 鷺坂和博        |
| ”    | 幾田哲夫        |
| 委員   | 増井康二        |
| ”    | 高橋修一        |
| ”    | 鈴木克佳        |
| ”    | 伊藤友之（執筆責任者） |
| ”    | 伊藤和彦        |

|       |      |
|-------|------|
| サポーター | 本馬基次 |
| ”     | 井上三男 |

### 校区のあゆみ 小沢

平成18年12月25日発行

|    |                       |
|----|-----------------------|
| 編集 | 小沢校区総代会<br>小沢校区史編集委員会 |
| 発行 | 豊橋市総代会                |
| 印刷 | 共和印刷株式会社              |

R2100  
環境省 資源循環局 認定印刷機

PRINTED WITH  
SOYINK  
大豆インク印刷



